

---

# アナザー

雷門ららら

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アナザー

### 【Nコード】

N0087D

### 【作者名】

雷門ららら

### 【あらすじ】

平成38年。日本。地球同位生命体の出現によって滅亡の危機に晒されていた人類は、『箱庭』の開発によって反撃の手段を得た。刻々と激化を続ける戦闘の中、優勢に立ちつつある人類であったが、しかしその『箱庭』にはある隠された秘密があつて……。

## 第一話

「……………私はあなたが憎い……………ノア」

コックピットの中。

あとは神経系を『箱庭』に移すだけという段階まできて、弥生は言葉を漏らした。

かぼそい、今にも消えそうな音量の、いつもの声色。

その表情もまた、いつものように無表情で、巖がいなくなっただけというもの、その能面には一層の磨きがかかっている。

弥生の目には光がなく、虚ろな眼で周りを見つめていた。

自分の周り、せまいコックピット。

金属の壁に、そして床を這う無数のケーブル。

弥生の目に飛び込んでくるのは、対地球同位生命体迎撃用の最終兵器、通称『箱庭』の内部構造だ。

『箱庭』のコックピットの中、じきに弥生の神経系のすべては『箱庭』にリンクされ、彼女は『箱庭』として地球生命同位体との戦闘に赴かなければならない。

弥生につなげられた各種の、神経伝達ケーブルは、すべて『箱庭』に接続済み。

頭と背中、手と足。

計4つの太いケーブルが、弥生の体と『箱庭』の機体とを繋げていた。

弥生は、見慣れた風景をもう一度見渡してみる。

せまい、コックピットだ。

体を動かすスペースもない、そんな場所。

操縦するという行為は必要ないのであるから、手足を動かせるだけのスペースもまた必要ない。

そんな一人がようやく入り込める場所において、さきほどから弥生は、無表情ながらも呪詛の眼で『箱庭』を見つめている。

「……………私だけの島ちゃん……………勝手に奪って……………連れてくなんて……………アレは島ちゃんじゃない」

弥生とて、『箱庭』に向ける言葉が無駄であることなど分かっている。

知能どころか、この機体単体だけでは動くこともできない代物。全長15メートルの鉄の塊。

それには人間という供物が捧げられない限りは、ただそこにあるだけの鉄クズに過ぎなかった。

「……………返して……………島ちゃんを返して」  
珍しいほどに、感情のこもった声色。

いつものような消えそうな小さな声も、巖が絡むと、そこに激情をとすのは相変わらずか。

しかし、感情を高ぶらせるのも一瞬のことである。

次の瞬間には、いつものように冷たい無表情を顔に浮かべるに至る。

そしてその瞳には、虚ろな眼差しにブレンドされた、達観した何かが浮かべられていた。

「……………無駄……………そう、無駄」  
何かを諦めるように息をつく弥生。

諦める……………いや、もはや彼女は、すでにすべてを諦めている。

「無駄。無駄……………無駄……………島ちゃん。私、島ちゃんみたいにはなれない……………お姉ちゃんなのに……………私」

呟いた言葉は、狭いコックピットの中で反響し、微妙な音のズレをもって弥生の耳に飛び込んでいく。

弥生はまだ『箱庭』と同化してはいないので、反響が響くのは人間としての鼓膜だ。

しかし、自分の体に神経伝達ケーブルが装着され、まるで本当に機械の体になったかのような現状からすると、そんなことはどうでもいいのかもしれない。

げんに、弥生が反応したのは、そのようなことではなく、自分の

口にした言葉だった。

お姉ちゃん。

自分の役割。

巖との関係を如実に表すその言葉。

そんな自虐的な言葉に、弥生は珍しいことに、自笑するように笑みを浮かべた。

「……………お姉ちゃん……………最初はそうだった……………でも最後には……………」  
言葉とともに思い返すのは、まだ浮き島に来ていなかった頃の思い出。

『箱庭』に乗ることもなく、巖が自意識を残していた頃の記憶だ。東京で、2人でもたれ合いあいながら、なんとか精神の安定を図っていたあの頃。

邪魔ものなどいなく、そこにはただただ2人きり。

巖という存在を独占することのできた、そんな時間。

その時間が、弥生にとっての最上の、ひとときだった。

しかし。

「……………『箱庭』乗りになるって……………反対しておけばよかった……………」

弥生の記憶は、その最上の、ひとときから少し未来へと移行する。そう、あの日々。

巖が『箱庭』のパイロットになりたいと言ってから始まった、あの時間。

東京から浮き島へ。

訓練に明け暮れ、そして桜島で過ごした、あの時代。

弥生が思い出すのは、浮き島へとやってきて、『箱庭』に関わり始めた頃の記憶だった。

「……………島ちゃん……………」

物語は。2年前に遡る。

/アナザー

すべての行為に、意味などない。

平成38年4月3日。日本、浮き島。

現在進行形で授業が行われている、一つの教室があった。

なんの変哲もない学校の教室。

古ぼけてはいるが、まだまだ現役をはることのできる校舎。

時刻が日中ということもあって、そこには当然のように生徒の姿があった。

生徒達は椅子に座り、教師が板書する文字を、ひたすら自分のノートへと書き写していく。

30人ほどが集まっている教室。

生徒達はそこで、椅子に座り、机にもたれかかり、熱心な様子でシャープペンシルを動かしている。

そんな、春の午後の授業風景。

それを束ねるのは、妙齡な女教師だ。

「はい、じゃあ次の人。教科書124ページから」

指定を受けた生徒が、おもむろに教科書を持ちながら立ち上がる。その教科書の題名には、『地球同位生命体概説』とあった。

4月ということもあって、春の陽気が教室に差し込んできている。ポカポカと温かい空気が漂い、遠くからは波の音と、うみねこの鳴く声が聞こえてきていた。

大自然に囲まれている、ここ浮き島。

その丘の上にある校舎にて、この授業は行われていた。

「えーと……地球同位生命体が現れたのは2017年。アメリカのミシガン州に、地球同位生命体のタマゴ、通称『ドーム』が現れ、そこから地球同位生命体が次々と生み出されていった。

地球同位生命体は地球上の生命を取り込み、その生命の身体をベースにして生成される。現在確認されているのは、『人型』『鳥型』『爬虫類型』の計3種類で、その全長はどれも15メートル以上である」

「はい、そこまで。これは今から8年前の話ね。補足しておく、この『ドーム』がどこから現れたのかということは、現在でも解明されていません。アメリカのミシガン州はすぐに地球同位生命体に

埋め尽くされて、ただの一度も調査することができなかったというのが、致命的だったわけです。

では、次の人。続きから」

教師の無機質な声が響く。

生徒を促す教師は、さきほどから生徒の方を見ようとしてもしていなかった。

まるで、この場に生徒などいないかのようになり、ただ無機質に授業を進めている。

それはこの教師に限らず、この『箱庭』乗りの教育施設である浮き島に在籍する教師は皆、このような授業形態なのである。

慣れというのは恐ろしいもので、今では生徒の全員が、このような授業形態に疑問を挟むことはなくなっていた。

「アメリカ政府は、自国の威信にかけて、問題の解決へと乗り出したが、状況はかんばしくなかった。無尽蔵とでもいうべき地球同位生命体の数は、さらに増大し、次々にアメリカ全土を覆っていた。2018年、一月。フアウラー大統領は、ついに原子力爆弾の使用を決意。核弾頭を乗せたミサイルは、同月ミシガン州に着弾し、『ドーム』は壊滅したかに思われたが、結局『ドーム』の一部を破壊するのみで、全壊させるには至らなかった」

「はい。この核使用の有用性には、現在でも疑問の声があがっています。正体不明の存在に対して、地球の尺度で考えるというのは、明らかに間違っていたのではないか。ということです。

げんに、核使用後の『ドーム』の働きは活発化し、地球同位生命体の生まれる頻度が高くなりました。そしてその結果が、というのがこの続きです。では、次の人」

「2018年、六月。アメリカ全土が地球同位生命体の勢力下につわり、アメリカという国は世界地図から姿を消した。同年、12月、アメリカ大陸全土を勢力下におさめる。

この一連の動きによって、死者数は10億人を超すといわれている。今ではアメリカ大陸に存在するのは地球同位生命体だけであり、



完全に人間は完敗するに至った」

「はいそこまで。今ので気をつけなくちゃいけないのは、別に地球同位生命体には知性はないということです。次々にその勢力をのばしています。地球同位生命体には人間を支配するという意思などありません。

彼らにあるのは単なる捕食願望。どうやら一番のお気に入りは人間のようだ、というのは前の授業でやりましたね。人間を食料とする、人間にとつてのはじめての天敵なるものが現れたわけです」

その言葉にさえ、教師の声色には、無気力な感情しかこもっていません。

教科書に始終、目線をおとし、生徒のほうを見ようともしない。まるでテープレコーダーのように、言葉を発しているだけ。

目は死んだ魚のように濁っているし、その表情には生者としての活力がまったく見ることができなかった。

そんな、やる気のないような様子で授業を進める、女教師。

しかし、授業を受けている生徒達は、それとは反対に、真面目な様子で授業を聞いていた。

女教師の言葉の内容にも、その場にいる生徒全員が、顔をしかめている。

どこからともなく現れた『ドーム』。

そしてそこから生成されるところの地球同位生命体。

その危害に遭ったのは、何もアメリカ大陸に住居を構えていた者だけではない。

日本人である彼らもまた、現在、地球同位生命体の侵攻に苦しめられているのである

だからこそ、彼ら彼女らは、こんなにも真面目に授業に取り組んでいるのだった。

「では、この単元の最後のところ……次の人、読んで」「はい」

女教師の言葉に返事をした、巖島巖が立ち上がる。

その名前とは打って変わって、まだあどけなさの残る少年といった表情。

背も高くなく、中性的な顔立ちをした男が、教師の指定した文章を読み始める。

「そして現在、地球同位生命体は海を越え、ユーラシア大陸、オーストラリア大陸などに上陸。着実にその勢力下を増やし続けており、それは日本でも同じことが言える。」

人間もまた『箱庭』の開発によって九死に一生を得た感はあるが、まだまだ劣勢なものには変わりがない。世界各地で、地球同位生命体との戦いは続いている」

その顔立ちに似合う、まだ声変わりをしていないような高い声だった。

舌つたらずなところなど、所によつては女の声なのではないかと間違えてしまうような声色である。

身長は150cmの前半といったところ。

肩幅も狭く、その姿は「少年」と形容するのがよく似合うだろう。

15歳。

高校1年生である巖は、見る人が見れば下手をしたら小学生にでも間違われてしまうような外見と声帯をしていた。

「はい。『箱庭』についての説明は、その授業の中で説明されるので詳しくはやりませんが、教科書に書かれてあることが事実なのは、皆さんの知っている通りです。」

そしてその『箱庭』に乗るために皆さんは自ら志願し、この浮き島に來たわけなのですから、その辺、常に意識をもって、授業に臨んでください。

では、今日はここまで」

丁度よく、4時限目の終了を知らせるチャイムも鳴った。

教師は、生徒の号令を待たずに、足早に教室からでていく。

その目には感情のこもっていない瞳。

女教師は無表情をもって、生徒の質問など受け付けないという意

思を示していた。

しかし、そんな教師の態度など、生徒にとっては日常茶飯事のことだ。

現に、教室の生徒達は、そんなことなど構いもせずに、つかの間の休息、昼休みを堪能しようと開放感に満ち溢れていた。

「……………島ちゃん……………いっしょにご飯食べよう……………中庭、いつもの場所」

「うん、弥生お姉ちゃん」

中原弥生が、いつものように巖に声をかけた。

それに巖は、一にも二にも同意する。

そして、目の前にいる弥生のことをまじまじと見つめた。

弥生は巖よりも一つ年上で、巖とは年端もいかない頃からの幼馴染だ。

小柄な体躯と、長い黒髪。

巖も小学生つぽく見られるが、この弥生ほどではないだろう。

16歳。

高校2年生であるとは思えないほど、その体は成長していなかった。

「あ、でも。僕、今日のご飯買ってないから、途中で売店に行きたいんだけど……………いいかな？」

「……………うん。行こう」

弥生の言葉に、「よかった」と笑う巖。

二人は慌しい教室の中、中庭へと向かって歩き出した。

伊豆諸島に浮かぶ、浮き島のすぐ隣には、桜島がある。  
船で5分もかからないが、陸地続きではない、もう一つの島。

この、浮き島と桜島をあわせた2つの島が、関東圏を地球同位生命体から守る最前線基地だった。

日本にはこのような地球同位生命体迎撃用の基地が、10の数だけあった。

関東圏近海に二つ。

中部地方近海に一つ。

瀬戸内海に一つ。

九州近海に二つ。

中国地方近海に一つ。

北海道を囲むように三つのトライアングル。

そのうち、関東圏を担当する一つが、この浮き島と桜島なのである。

『箱庭』乗りになるための教育を施す浮き島。

実戦部隊の常住する桜島。

巖と弥生の両名は、その浮き島のほうに属しており、その教育期間の6ヶ月を過ごしていた。

桜島から欠員ができれば、すぐにでもお呼びがかかる位置に、巖と弥生はいるのである。

「でもさー、弥生お姉ちゃん。桜島に行く人ってどうやって決めるんだろうね。浮き島に今いるのは……200人くらいだけ？ その中から、どうやって選ばれるんだろう」

「……………分からない」

無邪気に聞いてきた巖に、弥生は無表情で答える。

その無表情に加えて、声にも感情が見られなかったが、これはいつものことである。

巖は、そんないつもの様子の弥生の姿を見るに、気分を害することなく言葉を続けた。

「まあ、僕には関係ないことだろうけどね。やっぱり、成績とかで決まるんだろうから」

「……………島ちゃんは、そんなに『箱庭』……………乗りたいの？」

「そりゃあ、乗りたいけど……ダメかな？」

いちいち、自分の意見に同意がないと気がすまない巖であった。その同意をいつもあげるのが弥生の役目であり、それでこそ相互に依存しあった関係なのだといえるのだが、さきほどの巖の言葉には、弥生は賛成しかねていた。

それは、巖が『箱庭』乗りにになりたいと言ってきたことについても。

6ヶ月前。

突如として巖が、『箱庭』乗りにになりたいと言ってきた時、弥生は心底驚いたことを今でも覚えていいる。

自分の意見は決して言わず、何かの行動を起こす時も他人の承認がない限りは一步も動けないような男の子。

そんな存在が、自分で自分の意見を表明したのである。

世間一般からいえば、独立への第一歩。これは歓迎することはあっても邪険に思うことはないだろう。

しかし、その成りたいものが、『箱庭』のパイロットだというのはであれば話は別であった。

確かに『箱庭』というのは今の全人類の希望の星であり、あこがれている者も多くいることは確かだが、その仕事柄、当然に危険も多いのである。

いつ死ぬかも分からない『箱庭』のパイロット。

その戦死者数は、途方もない数であり、一度『箱庭』に乗ったら、生きて帰れないとまで言われていた。

だからこそ、『箱庭』乗りの募集は年中無休で行われており、それ故に巖のような人間でも試験に合格できたのである。

「……ダメじゃない……けど、危ない」

無表情に呟く弥生であったが、その雰囲気には心配そうな空気が流れていた。

そんな弥生の様子を見て、巖は取り付くかのような微笑を浮かべる。

心配ないよ、とでもいうような、そんな表情を。

「だから、大丈夫だよ、弥生お姉ちゃん。そりゃあいつかは乗るんだろうけど、それはまだまだ先だよ」

「……………なら、安心」

弥生の無表情に、安堵の感情が現れる。

それを見て巖は、少し納得いかないような感じを受けたが、それを自分の思いの中だけでとどめていた。

そりゃあ、僕は頭もよくないし、運動神経だってよくないけど…………。

それでも『箱庭』に乗ってみたいという思いだけはあつた巖だった。初めて自分の主張をここまで通してきた。

いつもいつも、弥生の承認機関にすぎなかった巖が、初めて自分の意見を表明したのが、この『箱庭』のパイロットになりたいという事なのである。

そんな巖が、できることならば、『箱庭』に誰よりも早く乗りたいたいと思うのは、至極当然ともいえた。

「……………島ちゃん」

物思いにふける巖の横で、声がした。

巖が急に黙ったことに何かを感じ取ったのか、弥生がおもむろに箸を持ち上げ、そして巖に話しかけていた。

「……………島ちゃん……………あーん」

弥生は弁当箱の中の卵焼きをつかみ、それを巖へ食べさせようとしている。

箸には卵焼きがつかまれ、それが巖の口の前で停止している。

もちろん、「あーん」というのは、食べさせやるから口を開けるという意味表示だ。

「な！？　ちよ、ちよつと弥生お姉ちゃん、ここ学校だよ？　誰が見てるのかも分からないのに……………」

「……………あーん」

有無を言わせない雰囲気。

気弱な性格の弥生がここまでするなんて、おそらく、彼女を知っている者なら驚くことだろう。

消極的で、あまり周りとは打ち解けることのできない弥生。

彼女がこのような大胆な行動をとれるのは、巖の前だけだった。

「あ、あーん」

弥生にそこまでされては、巖が断れるはずがない。

おずおずといった具合に巖は口を開け、そのわずかな隙間にすべらせるかのように、弥生は卵焼きを巖へと食べさせる。

「……………おいしい？」

「う、うん……………美味しいよ」

巖の言葉に、よかったとばかりに、一瞬だけ無表情を笑みへと変える弥生。

その表情を見て、巖は自分の頬が赤くなるのを感じる。

やっぱり、笑ってるほうが可愛いよなー、弥生お姉ちゃ

んは。

その内心の思考を読まれないために、巖は赤い顔のままに、横を向く。

頬をポリポリと掻きながら、浮き島に佇む雄大な自然を眺め始めた。

巖の眼前。都会では見ることでできない、人工物のいつさいない、天然の自然が広がっている。

春になったということもあって、そこにあるのは生命の合唱団だ。緑たゆませる若々しい木々。

それが巖と弥生の周りを取り囲んでおり、少し暑いぐらいの日差しから2人を守っていた。

芽吹いたばかりの若葉の隙間から、太陽の光が地面を照らしている。

小さな小さなスポットライト。

それらの影と光のアンサンブルが、見る者の心を癒すのは間違いないだろう。

肌を揺らすのは心地のよい春風であり、優しい匂いを運んできてくれている。

すっー、と息を吸い込むと、まるでバニラアイスを食べた時のような風味が、口の中に広がった。

空気に味がある。

見渡す限りの大自然。

文明の香りなど、自分達の通っている学校と寮以外には何もないような、そんな場所。

そのことを再確認した巖は、6ヶ月前まで住んでいた東京との違いを思い返し、リラックスするように息をはいた。

そして、まるで愛しいものでも見つめるかのような、そんな満ちたりた表情を、眼前に広げる。

「……………島ちゃん？」

どうしたの？ とばかりに首をかしげる弥生。

それに対して巖は、いやさ、という前置きのあと。

「東京と違って、ここはいい所だな、って。ゆっくり空気が流れてるっていうか、そんな感じでさ」

「……………うん」

巖の言葉、それに対して弥生もまた同じような感想を持っていた。2人とも、東京にはあまりいい思い出がない。

まるですべての存在が自分を生きたまま殺そうとしているのではないかという雰囲気。

それに対して抵抗するように、巖と弥生の2人は一緒に生きてきたのである。

幼馴染というものが、高校生になっても続いているというのは、ひとえにその相互依存関係故にだろう。

「じゃあ弥生お姉ちゃん。もうそろそろ校舎の中、入ろうか。あとちよつとで予鈴が……………」

巖の言葉の途中、それを途切れさせたのは、校舎のほうから流れてくる、館内放送を告げる音楽だった。



スピーカーから聞こえてくるのは、無機質な、余分な感情を差し込む余地のない機械音でる。

そして、その告げられている言葉の内容というのは、

『次に読み上げる者は、至急、理事長室まで来るように…… 敵島巖。敵島巖は、至急、理事長室まで来るように。繰り返す。敵島巖。敵島巖は至急……』

その言葉の内容を聞いた巖は、ビクッと体を震わせた。突然の呼び出し。

このような事態に不慣れな巖は、不安気な表情を形成するしかない。

その表情のままで、巖は弥生に助けを求めるように、

「な、なんだろう。僕、何も悪いことしてないけど……」

オドオドとろたえ、どうすればいいのかわからないというように右往左往し始める。

その様子は、ただただ滑稽なものであり、見る者をイラつかせるのに十分な醜態だった。

しかし弥生は、そんな巖を安心させるように、若干、優しい感情を入れた声色で、巖に話しかける。

「……………大丈夫……心配ない。とにかく行ってみよう？」

「う、うん」

パタ、という具合に、弁当箱を閉じ、準備万端な弥生。

そのままの勢いで弥生は、まだオドオドとしている巖の手をとって、理事長室へと急ぐのだった。

巖を呼び出す館内放送から、5分後。

2回のノックの後、理事長室に巖が入ってきた。

はたから見ているだけで、過剰に緊張していることが見て取れるような、そんな様子。

さきほどまでのオドオド具合はナリを潜めているが、それでも尚、それが高校１年生の態度ではないことは確かだった。

まるで、保護者の手から離れた、甘えた幼稚園生。

一目見て抱く印象はそれであり、この第一会議室にいる大人たちもまた、そのような感想を抱いていた。

「し、失礼します。 巖島巖。 ただいま参りました」

「やあやあ、よく来たね。 まあ、緊張しないで、ちょっとそこにか  
けなさい」

「は、はい」

ぎくしゃくとした動きを見せる巖に対して、初老の老人……教育施設の理事長が着席をうながす。

それにならつて、やはり緊張した面持ちの巖が、言われるままにその椅子に着席した。

理事長は高価そうなソファーに座っており、巖の座っている椅子はその前方。机をはさんだ所に配置された、クッションのしいてあるパイプ椅子だった。

理事長室といっても、それほど広い部屋ではない。

ましてや周囲は本棚で囲われているので、その印象は理事長室というよりは書斎と言ったほうが正しいだろう。

そんな、浮き島教育施設の理事長室。

そのソファーに座っている初老の理事長の他にも、この部屋には一人の人物がいた。

中年らしき大人が一人、巖の目の前の椅子に、冷たい表情をしながら座っている。

「いやなに。 今日はお説教ではなく、めでたい話なんだ。 心配はいらないから、君も少しはリラックスしてはどうだね？」

ニコニコと、まるで能面のような笑顔を浮かべながら、理事長は話す。

顔の筋肉が、『笑顔』という表情を作っているに過ぎない、そんな人工物に溢れた笑顔。

それはこの理事長の目の奥を覗けばすぐに分かることで、その黒い2つの瞳は、輝くこともせず、そこにただあった。

「は、はい」

しかしそれを巖は見抜くことができない。

巖はただただ、理事長の言葉にホッと息をついているだけだった。めでたい話、という理事長の言葉を受けて、とりあえず安堵した巖。

そんな巖は、若干緊張をほぐし、理事長と中年の男と対峙した。

「それで、そのめでたい話というのはね……うん、ここからはヒョウドウ君のほうから話してもらったほうがいいかな」

「はい」

言葉を振られた中年の男……ヒョウドウは、そっけなく答えた。

まるで浮き島にいる教師よりも、無関心と無表情というのを絵に描いたような男。

ヒョウドウの風貌は、背が高く、少しやせ気味といったところか。眼光だけが鋭く、それが無表情な顔に一つの印象深さを与えている。

無機質といった感じのヒョウドウ。

その雰囲気全体が、この男には人間味というものが無いのだということを教えてくれていた。

そしてその冷たい視線と声色をそのままに、ヒョウドウは巖に向かって言葉を投げかけた。

「ゲンジマイワオ、お前は明日づけで、桜島13小隊式番艦の予備パイロットに配属になった。明日、0600時に船が港に迎えに来る。荷物をまとめ遅れないように集合しろ」

ヒョウドウの言葉に、巖は反応できなかった。

その言葉の意味は分かっている。

自分が何を言われたのかは分かっている。

簡単なことだ。至極簡単なことだ。

つまり自分は『箱庭』の予備パイロットに選ばれたということ。明日になれば桜島に出向することになるということ。

言葉の意味は分かる。

だが、それがなぜ自分なのかという理由については、まったく理解ができなかった。

場に一時の静寂が訪れる。

その静寂の中、動きを見せているのは、初老の理事長の能面のような笑顔だけだった。

気持ちの悪い、目がまったく笑っていない『笑顔』を、さきほどから巖に対して送り続けている。

「返事はどうした」

「え？ あ、は、はい。了解しました」

我に返った巖は、それでもなんとか敬礼して見せた。

それを見て、ヒョウドウはなんのリアクションも返さない。

代わりに動いたのは理事長であり、その『笑顔』をそのままに、巖に対して話しかけた。

「ああ、もういいよ、ええと……イワオくん。退出してけっこう」

「は、はい。失礼します」

興奮そのままという具合に巖は返答し、そのまま理事長室からでていく。

退出したことを確認したヒョウドウもまた、理事長に対して一礼をして部屋からでていった。

残ったのは、初老の老人ただ一人。

蛍光灯の照らす中、理事長は机にヒジをつけながら、いつまでもニコニコと『笑い』続けるのだった。

ドアの閉まる音を背に、巖は理事長室の前で待っていた弥生と対面した。

無表情ながらも心配そうにしている表情を見ると、巖はなんともいえない感情を胸に受け、ブイとばかりにブイサインを繰り返した。  
「やったよ弥生お姉ちゃん！！ 僕、桜島に行けるんだ！！」

「……………え？」

いきなりの言葉に、それがどういう意味なのか分からないという表情を浮かべる弥生。

そんな事とは露とも知らず、巖はただただ嬉しさを全身で表現するだけだった。

「自分でも信じられないよ。こんなに早く、『箱庭』に乗ることができるなんて……………すごい嬉しい！！」

「……………島ちゃん。それってどういう……………」

その時、巖の背後の理事長室のドアが開いた。

そこから出てきたのは、さきほどまで巖と相対していたヒョウドウだった。

「あ」

無表情で巖と弥生を見つめるヒョウドウ。

巖は、恥ずかしそうな表情をつくりながらも、そのヒョウドウに對して言葉を創る。

「あ、あの。僕、頑張りますから。明日から、よろしく願います」

顔は赤く紅潮し、勢いよくおじぎをしながらの言葉。

弥生に負けず劣らずの消極的な巖が、このような態度をとるとは、それだけ『箱庭』に乗れるのが嬉しいのであろう。

その様子は、普段からは考えられないような浮かれ具合だった。

「……………」

言葉を向けられたヒョウドウは、しかし無言。

無表情そのままに、巖と弥生を一瞥しただけで、颯爽ときびすを

返した。

そのまま、カツンカツン、という足音を残して、廊下の向こうへと消えていく。

「頑張ります。頑張りますから」

その消えていく背中に対して、巖は声をはりあげていた。

いつまでもいつまでも「頑張ります」という言葉を連呼する巖。それを見て、弥生の表情には心配気な感情が浮かぶ。

一連の流れを見て、弥生にも巖の言っている言葉の意味が分かったのだった。

つまり、

巖が、

一人で、

先に、

桜島で、

『箱庭』に、

乗るということ。

「……………島ちゃん」

「ん？ どうしたの？ 弥生お姉ちゃん」

「……………島ちゃん……………分かってる？ 桜島へは一人で行くんだよ

？……………一人で」

「あ」

今更ながらその事実気付いた巖。

一人で行くということ。

弥生と離れ離れになり、たった一人で桜島に行くということ。

幼稚園の時分から常に一緒にであり、相互に助け合うことによって、精神的な苦痛をなんとか回避してきた。

それはつまり、2人で1人。

もはや自分の半身とでもいうべき存在。

その存在と別れを告げ、自分は桜島へと行こうというのだ。

普段の巖であれば、そのようなことは考え付くまでもない愚考で

あり、弥生と離れ離れになるなどという選択肢を選ぶことは考えられないのであるが。

「で、でも。パソコンでテレビ電話できるし……うん、僕、毎日電話するよ!!」

「……………」

巖の言葉に、表情の中の感情がすべて凍結したかのような弥生。裏切られた、というのは語弊があるだろうが、弥生はそれに近い思いを抱いていた。

「ああ、やった。『箱庭』……よし!!」

『箱庭』に乗れるという『快』が、弥生と別れるという『苦』の感情よりも勝っていた。

それ故に巖は、弥生の悲しそうな無表情に気付くことができず、子供のように振る舞い続けるのだった。

それを見つめ続けるのは弥生の表情。

そこには、さきほどまでの負の感情ではなく、わが子を心配する母親のような表情が浮かんでいた。

（続く）

## 第二話

目の前には、無力感しか転がっていない。

平成38年4月6日。日本、浮き島。

関東地方、千葉県沿岸。

時刻は真昼であり、太陽の光が、醜いソレを照らし続けている。計20体の奇形の群体。

全長15メートルの地球同位生命体が、さきほどから太陽に照らされていた。

その周辺には、住居の一つもなく、ただただ鬱蒼と茂る木々と、ぼつかりとあいた平原があるだけだった。

近くには寂れた漁村があるが、それも過去においてすでに廃れきっており、趣味で漁を続けている者しか住んでいない。

というか、もともとそこには人など住んではいなかった。

田舎にある、人里離れたような、そんな場所。

夏になるとここでも、キャンプ客でにぎわうことになるのだが、今現在では人の一人もここにはいない。

人気がない森の中。

そこに広がる見通しのいい平原。

そこが今回の戦場だった。

『一箇所に固まり、ライフル用意。30間まで接近したら発砲。10間まで迫った時、全員着剣……のちは白兵戦だ。以上、通信終わり』

各『箱庭』に、通信が流れる。



それを受信したのは、第13小隊と第20小隊の計10体の『箱庭』だった。

人型の決戦兵器。

体長15メートル強の鉄の塊が、一箇所に固まり狙撃の準備を行っていた。

その動きは、滑らかというか、人間の動きにしか見えない。

しかしそれも、『箱庭』の構造……パイロットの神経系を『箱庭』へと移し、自身を『箱庭』として認識し、行動するというその構造にあつては、そのような動きは至極当然のものだといえた。

5m近い巨大な銃身を、10体の『箱庭』は前へと構える。

第13小隊が前方、片ヒザについての射撃体勢。

その後ろで第20小隊が直立姿勢で銃身を構えている。

その狙い。

それは今まさにこちらへと突進してくる、20体あまりの地球同位生命体だった。

その形状は『人型』

全長15メートルの醜悪な塊り。

『人型』といっても、そのシルエットが人なだけであつて、その他の部位には人間との関連性など一切見ることができない。

外部の皮膚とでも言うべきところは爛れており、まるで全身火傷を負ったような、吐き気を催すような形状。

それには目など当然なく、ドロドロとしたヘドロが全身を包み込んでいるかのような奇怪な姿をしていた。

それらが、キーンという鼓膜をマヒさせるような叫び声をあげながら、20体ほど突進してくる。

地響きは振動となり、さきほどから地面を揺らしていた。

その奇形の群体の狙いは、当然に『箱庭』だ。

自分達の食事の邪魔をする敵に対して、地球同位生命体は盲目的な突進を繰り返している。

『撃て』

直接に自分の鼓膜に響いた通信。

それを受けた10体の『箱庭』は、自身の持つライフルのトリガーをひいた。

直後として、破壊の行使がなされる。

次々と発射されていく鉄の塊が、突進してくる地球同位生命体へと直撃する。

腕をなくし、足をなくす。

顔面がなくなったと思ったら、その直後に茶色の血液がその首なし死体から吹き出てくる。

銃弾のカーテンはとどまることを知らず、地球同位生命体の命をむしりとっていった。

ガチン、ガチンと、撃っては弾を充填し、さらにトリガーを絞る。計10体の『箱庭』は、密集隊形をとっているため、その銃弾の行使はまさに破壊の雨だ。

充填とトリガーの絞る音。

それを掻き消すほどの轟音である、火薬の爆発する音と音速をこえる銃弾の数々。

一つの音楽のようなBGM。

その音楽が、今、唐突に止んだ。

『全員、着剣』

命令を即座に実行する『箱庭』達。

その手に持つライフルに、自身の背後に備え付けられている刀身を装着する。

ガシン、という接着音のあと、形成されたのは一つの凶器だ。

5m近い銃身。その先端部分につけられた、『突く』ことに特化した刀身。

それを脇に構え、隊列を組みなおす。

俗に言う並列隊制。

前方の第13小隊は立ち上がり、それに後方の第20小隊がその隣へと並ぶ。

横一列に形成された並列隊制。

そして手にもつ銃刀を前へと突き出し、槍のように構えた。

『勝手に撃つな。こちらから命令した時だけ射撃しろ。基本、銃刀戦闘。以上』

『箱庭』に乗っている各パイロットは、その命令に忠実に行動する。

まるで自分達に意思などないかのよう。

人間らしい動きは、その『箱庭』達からは一切見ることができない。

その動きは、機械だ。

隊列を組む一連の動きは、人間のものでありながら機械的な動きを連想させるものだった。

兵隊に意思など必要ない。

独創性など無駄なだけだ。

必要なのは命令どおりに行動する錬度。

『箱庭』に求められているのは、英雄ではなく、軍隊における兵のソレだった。

ライフルの射撃だけでは破壊できなかった4体の地球同位生命体がせまる。

銃刀による戦闘が、ここにきて落とされた。

「以上が、今回の戦闘概要……質問は？」

『箱庭』を納めるためのドックにて、無機質にカネコが巖に話しかける。

第13小隊式番艦の本パイロットであるカネコが、その予備パイロットであるところの巖に話しかけているのであった。

千葉県沿岸での戦闘から2時間後。

カネコ他、第13と第20の小隊の本パイロットは、ここ桜島に帰ってきていた。

予備パイロットである巖はというと、他の予備パイロットの面々と同じように、桜島で臨戦状態のまま待機。

そしてさきほど、戦闘を終えた本パイロット達が輸送ヘリで帰ってきたのを迎え入れたのである。

カネコと巖が今行っているのは、その戦闘の情報交換であった。本パイロットから予備パイロットへと、戦闘において重要であると思われたことの報告がなされる。

それを受けて、予備パイロットが『箱庭』に乗る際の参考にしようというのが、この戦闘報告の趣旨だった。

巖の乗ることになる『箱庭』の、本パイロットであるカネコ。

桜島では、同一『箱庭』の本パイロットと予備パイロットが同じ部屋で生活を共にする。

つまり、住居においても相部屋となる一心同体の存在が、今、巖の目の前にいるカネコなのである。

カネコの風貌は、ひとえに枯れた若木といったところか。

年齢的に言えば18歳であり、まだまだ血気盛んな年頃だろうというのに、その瞳には力がなく、全身からも活力というものがまったく感じられなかった。

身長は170cmくらいであり、当然に巖よりも背は高い。

かけている銀縁のメガネが印象的であり、このような死んだ魚の目をしていなければ、理知的な青年に見ることができただろう。

無表情で無関心。

その声色にも、日々を生きる生者の気力はない。

そんなカネコの風貌であつたが、しかしこれは何もカネコに限ったことではなかった。

巖が配属になった第13小隊の本パイロットと予備パイロット。

そしてさきほどの千葉県沿岸における戦闘をとにした第20小

隊の面々もまた、このカネコと同じような印象を抱かせるのである。そのような状況に少しだけであるが、違和感を覚えている巖。

しかし、今はその疑問を口にする時ではなく、カネコに対する質問をすることのほうが重要であった。

「あ、あの……地球生命同位体と戦うのって……どういう感じなんでしょうか。やっぱり、怖いものですか？」

「……いや、それほどでもない……ふふふ、けれど音楽隊なんだよぶっきらばうにただそれだけを返答するカネコ。

巖はどうしたものかと困ったような表情になるが、それ以上何かを質問することなどできなかった。

消極的で引っ込み思案な性格は相変わらず。

しかし、東京にいる頃の巖であったならば、このような質問すらしていなかっただろう。

弥生と離れてから3日目、それでも巖にしては、うまく周りやっついていけるといえる。

「他に質問がないようなら、戦闘報告は以上。ここで解散だ」

「は、はい。ありがとうございました」

解散を自分で告げ、そのまま巖に対してなんの反応も見せることなく背中を向けるカネコ。

誰かと待ち合わせをすることもなく、一人きりで自分の部屋へと帰ろうとしている。

そんなカネコの後姿を、巖は痴呆のようにただぼんやりと見つめているだけだった。

自分は何をすればいいのか、どうすればいいのか、ということを自分で決めることができない。

それは今まで、弥生の役割だったのである。

それが今では、自分で自分の行動を決めなければならない。

自由という地獄が、巖の目の前には転がっていた。

「あれ？旋律？ ああ、忘れていた……あ、君、ちょっと……ああ、忘れていた。ああ、忘れていた」

踵をかえし、カツカツという足音を残してドックの中から出て行くようにしていたカネコが巖のほうへと振り返る。

その顔には『真面目』という一文字。

そしてそのままに、巖にくだされていた命令を伝達した。

「君、まだこいつに、自分の神経系のデータ移してないだろ？ それじゃあこいつには乗れないんだから、とっとと医療所でデータを採集してもらってこいだって」

「え？ あ、あの。こいつって……どいつですか？」

「……こいつはこいつだよ。このポンコツ」

カネコがそう言いながら指を指し示したのは、自分の乗る『箱庭』だった。

人間型の、全長15メートル超の重工な決戦兵器。

一昔前のロボットアニメにでてきそうな鉄の塊が、そこにはあった。

「あ、そうですね。『箱庭』に自分のデータを……」

「医療所だから。じゃあね……だからハミガキコじゃダメなんだよ携帯電話じゃなきゃ……」

言葉少なに、言つてのけ、そのままカネコは今度こそ姿を消す。

残ったのは巖と計5対の、第13小隊に属する『箱庭』。

他のメンバー達は、すでに姿を消したあとだった。

「……医療所」

呟いた巖は、そこに行くために、自分の情報端末を開いて医療所の場所を探る。

何をなすべきかという明確な行動指針をもらった巖は、胸はずむ思いでその場所へと急いだ。

桜島は、浮き島とは比べ物にならないほどに、広い。

『箱庭』5体とその補助スタッフを含めた集団を、ここでは小隊と呼び、その小隊が桜島には25部隊配属になっているのである。各小隊ごとに『箱庭』を納めるドックは異なっており、25もの大きな建物がここ桜島には乱立するのであるから、桜島が浮き島に比べて広いということも無理はない。

さらには『箱庭』を本州へと移送するための滑走路と各小隊専用の軍用輸送ヘリまで用意されている。

それを実現させるだけの桜島の面積は、押して知るべしの広大さを誇っていた。

そんな桜島。

居住スペースである建物や、隊長専用の私室がはいっている建物など、広大な自然の中にあつて、その人工物が乱立する様は中々に終末思想じみていた。

そしてその広さと建物の乱立さ故に、ここ桜島に初めて来た者はどこに何があるのだから最初のうちは分からなく、よく迷子になるのである。

そういうわけで巖も、カネコに言われた「医療所に行け」という命令を、その2時間後になってようやく達成することができていた。命令を受けて、2時間を桜島をさまようことに費やした巖の目の前には、真新しい建物がある。

「着いた……のかな？」

目の前に掲げられている、『桜島医療所』という看板を見て、巖は言葉を漏らす。

それは大きな、医療所だった。

建物一つをマルマル使ったその場所。

桜島に存在するすべての者の健康を担い、さらには地球同位生命体への情報分析やら何やらの研究も兼ねるその医療所は、さながら総合病院のような様相を呈していた。

巖はその大きな建物に、少し怯えながら入って行く。

中央の入り口から、医療所の中へと。

ガラス戸の向こうには、どこかの病院と同じような、受付のような場所が広がっていた。

広い、室内だ。

そこには病人らしき人がソファに座っており、診察の順番を待っていたりする。

普通の病院のような雰囲気と空気。

その中で、近くを歩いていた白衣姿の女の医師に、巖は声をかけた。

「あ、あの。すみません。僕、巖島巖なんですけど……今日ここで、『箱庭』の……」

「ああ、あなたが巖島くんね、待ってたわ。じゃあ着いてきて」

巖の言葉が終わる間もなく、白衣姿の女医は診察室の奥へと歩いていく。

それを慌てたように追い、巖はその女医の横に並んだ。

「私はタカダリョウコ。この医療所で『箱庭』関係の現場を任されています。まあ、何かと親密なお付き合いを死ぬまでする間柄だからこれから一つ、よろしくね」

「は、はい。こちらこそよろしく願います」

澄んだ声色の中にも活発さを感じさせるエネルギーを宿しながら、タカダは巖にしゃべりかけた。

タカダは女にしては高い身長であり、そのキリッとした目元には、理知的な雰囲気を見ることができる。

髪は黒であり、それを少し短めに切りそろえていた。

それが彼女の持つ美貌をいっそう募らせる結果となっており、場所が場所なら人気者の医師になれるだけの風貌をしている。

「じゃあ、面倒臭いから、歩きながらで事前の説明をするわね。巖島くんは当然、『箱庭』の操縦方法については知っているでしょ？」

「ええ、それは……」

「まあ当然よね、授業とかでも繰り返しやってるんでしょから。」



でもまあ、とりあえずというか、慣習じみたというか、マニュアル通りというか、それに沿って説明すると、『箱庭』という乗り物は、それまで存在していた乗り物とは一線を画する存在です。

自動車を思い浮かべてみてください。自動車に乗るのはあくまで人間であり、人間は自動車を『運転』します。けっして、人間が自動車そのものになってタイヤを動かすということはありません」

タカダの口調は説明口調になり、さきほどまでの気さくな感じから丁寧な口調へと変わっていた。

それは何か事務的なものを感じさせる。

毎回毎回、桜島に来るパイロットにこの説明をしてきたのであるから、その口調がいわばルーチンワークになるのも無理もない話だった。

「しかし、『箱庭』はまさにそれです。つまり自動車の例にたとえるなら、操縦者が自動車そのものになって走行するという、その一連の動きです。

自分の足を動かすということはすなわち、自分の体、つまり4つのタイヤを動かすことに直結し。左に曲がりたいと思うなら、自分の体、つまり車体を左へと曲げるという、ことを意味します」

タカダは、「つまり」という前置きのあと。

「自分の体がすなわち『箱庭』になるのです。『箱庭』の左手を動かしたいのであれば、自分の左手を動かせばいい。機械との同一化、それが『箱庭』の操縦方法です。

そして、それを実現可能にしているのが、神経リンクシステムです」

「……………」

「頭、手、足、頸椎のある背骨。各4つの部位と『箱庭』の機体を、神経伝達ケーブルが繋げ、パイロットの神経系をすべて『箱庭』に移すことによって、それが実現されます。

神経をリンクさせ、自身を『箱庭』だと認識できるようになったあとは、コックピットにある自分の体は単なる入れ物にすぎません。

その最中では自分はいくまで『箱庭』の体であり、人間としての体は意識の外へともっていかれます。

と、まあ、このくらいでいいかしらね。こんな話、退屈なだけだし」

タカダの言葉の通り、巖はその話を、退屈そうに聞いていた。

その説明は、すでに授業の中で聞いていたものであり、というかすでに巖は『箱庭』と同化するという体験をすでにしているのである。

あの、自分の体が体長15メートルの鉄の塊になった時の感動。視界は高く遠くまで見通すことができた時のあの感動。

さらには、自分の運動能力の上をいくまでの『箱庭』の性能。

それをあますことなく体験してきた巖にとって、タカダの説明は退屈以外の何ものでもなかった。

「あ、ここここ。この部屋でちょっとスキャンするから。入って入って」

廊下の奥まで歩き、階段を上り、関係者以外立ち入り禁止の看板を通り越したその先で、タカダが一つの部屋に巖を案内する。

なんの変哲もないような、壁一面を白色でおおわれた病室。

そこで目をつくのは、CTスキャンのように全身を調べることのできるような機械だった。

「じゃあ、そこに横になって。すぐにすむからね。あ、服とかは脱がなくていいから」

その機械に横になれという言葉。

それとともにタカダは、そのまま機械の横にあるコンピューターのところに陣取る。

巖は言われたとおりに、その機械に仰向けの状態で寝そべり、それと同時に機械が作動した。

寝そべった状態の巖の体の表面を、赤色の光線がくまなく這い回る。

ありがちな「ビー」という機械音とともに、その光線は巖の神経

のすべてを調べ上げていた。

「というか、君の神経系のスキャンは、もっと早めにやっておかなければダメだったんだけどね。」

知つての通り、『箱庭』は20歳以下の人間だったらそれはもう幼稚園生にだって動かせるんだけど、その人間の神経の配列具合だとか特徴だとかを隈なくチェックしないと、指一本動かせないんだから。

……ホント、いくらなんでも油断しすぎでしょうに」

「……でも、なんで20歳以上の人間には、『箱庭』は動かせないんでしょうか？ 授業でその知識だけは学びましたが、ちよつと原理が分からなかったんですが……」

赤色の光線が自分の体を調べ上げるのをそのままに、巖は、浮き島時代から疑問に思っていることを問いかけた。

研究機関を兼ねるこの医療所の医師であるならば、その辺のことを分かりやすく教えてくれると思ったのだ。

しかし、タカダから返ってきた言葉はといえば、

「分からないわね」

「……………」

「勘違いしないでね。これは私個人だけが分からないってことじゃなくて、世界の学者連中全員が分からないってことだから。」

仮説はいくらでもあるんだけど……たとえば、神経系をすべて『箱庭』に移すというのは、年をとった大人には柔軟性が欠けるから不可能なのである、とか。まだ「自分」という確固としたものを持つていない若い子であるからこそ、神経系を無機質な鉄の塊に移すことができるのだ、とか、そんな仮説がね」

「は、はあ。でも、原因は今だに不明であると」

「そう、その通り……はい、終わり。もういいわよ」

タカダは目の前のキーボードを素早く叩くと、巖にこれで大丈夫とばかりに合図を送った。

巖は、随分と早かったなー、という感想とともに、その機械から

起き上がり、そしてタカダと相対する。

「あ、あの。ありがとうございます」

「いえいえ、これは仕事だからね。そんなことで御礼の言葉なんてもらう筋合いはないわよ。」

じゃあ、またなんかケガとかしたら声かけなさいな。私はずっと、死ぬまでこの医療所にいるからさ」

「は、はい。あ、ありがとうございました」

返事と共に、またもや律儀にあいさつをした巖は、そのまま部屋の出口へと歩いていく。

短時間の邂逅であったが、それでも力ゼをひいた時に病院はどこにあるのかということを知ることのできた巖は、若干安心したかのような表情。

そして、部屋の出口まできた巖は、もう一度タカダに一礼。その部屋から出て行った。

カツンカツンという、巖の廊下を歩く足音。

それが静寂に纏わり憑かれている病院にあって、非常によく響いてくる。

カツン、カツン、カツン、と。

さらには、その足音が聞こえなくなったその時点。

その時になってようやく、タカダはその表情に変化をもたらした。何かを吐き出すように、タカダは「ふうー」とばかりに息を吐く。まるで、それまでは気を張った演技をしていたかのような、そんな様相。

現にタカダの顔には、疲れきった表情が浮かんでおり、自分の偽善に嫌気がさしているかのような感情が見て取れた。

「まあ、でも。知らない幸福は、そのままにさせときたいしね。こんなのは無駄だし、なんの意味もないんだろうけど……」

一人呟いたタカダは、白衣のポケットからタバコを取り出すと、無造作にそれに火をつけ、吸い始めた。

ニコチンのきついその銘柄は、一瞬にしてタカダの頭から思考を

奪い取る。

自分への批判も、無力感も、今この瞬間にはなくなる。  
これがタカダに許された、ただ一つの至福の時間であった。

巖島巖は第13小隊式番艦の予備パイロットである。

そして、予備パイロットは本パイロットと生活を共同するという  
のが、桜島にある古くからのしきたりだった。

はたしてその目的は、健全な魂を育成することにあるのか、はた  
またチームプレーと助け合いの精神を高めようとしているのか。

その真意は計りかねるが、しかしこの決まりだけはなぜか、今ま  
で守られてきたのだった。

おそらく、「最初に決められたことだから、とりあえずこのまま  
にしておこう」といった情性によるところも大きく関係しているの  
であろう。

とにかく、本パイロットと予備パイロットは、なんの例外を挟む  
ことなく、同じ住居で起臥寝食をともにする。

男だろうが女だろうが一切関係ない。

桜島に古くから伝わる、純然たるルールが、そこにあった。

そんなわけで、寮である。

カネコと巖がともに共同生活を営んでいる、学生身分にしては  
広いその居住スペース。

台所完備。

風呂完備。

勿論、トイレとお風呂は別々。

奥にはテレビを見るリビングがあり、その横にはベッドが二つ置  
いてある寝室がある。

その寝室は広い面積をほこるリビングとどっこいどっこいなまでに広く、せまっ苦しいということはない。

そしてその寝室には、大きな二つの机まで完備されており、下手な一戸建てよりも便利で快適な住み心地を実現させていた。

そして今、その二つの机のうちの一つに座っているのが、巖である。

時刻は夜中であり、外はすでに暗闇。

巖の顔を照らしているのは、机に備え付けられている電灯と、そして現在起動しているデスクトップ型のパソコンであった。

同室のカネコはすでに寝ているのか、ベッドの上に横になっていない。

カーテンで一応は、勉強部屋とベツトルームを区切ってはいるが、それでも微弱ながら光は漏れているのだろう。

巖は、カネコに申し訳ないと思いながら、キーボードを打ち続けるのだった。

『でも、最初から想像していたけど、やっぱり僕が『箱庭』に直接乗るってことはないみたいだよ。僕、予備パイロットだし、本パイロットのカネコさんが体長不良で『箱庭』に乗れなくなった時だから、僕の出番は』

そこまで一挙にキーボードを打つと、そのまま『書き込み』と表示されている場所をクリックした。

パソコンの画面には弥生の姿が映っており、その下側にはメッセージボードがある。

巖と弥生は、チャットでもメールのやり取りでもないこの行為に、さきほどから精をだしていた。

最初のうちはパソコンを介してのテレビ電話だったのだが、カネコが眠るためにベッドに横になったことを受けて、このようなやり取りを始めたのである。

弥生から離れて3日目。

桜島に来てからというものの巖は、毎日のように夜、弥生と連絡を

取り合い、近況などを報告していた。

『……………それは重畳……………でも無理しないで……………島ちゃんが一緒に暮らしているっていう人は親切?』

弥生からの返答が、巖のパソコン画面上に浮かぶ。

それを見て巖は、少しだけ苦笑。

向こうもキーボードで文字を打っているのにも関わらず、律儀にも三点リーダー(……………)を多用しているのだ。

何かそこにキャラ作りのいつかんがあるような気がして、巖は素直に可愛いなあという感想を抱いていた。

『大丈夫。カネコさんはとても優しい人だよ。でもまあ、会ってから3日目になるのに、まだ名字だけで名前は教えてもらっていないけど……………』

それも付け加えるならば、名字さえ教えてもらっていないけど、ということである。

巖はカネコからまだ自己紹介をされていなく、彼の名前がカネコであるということも、この部屋の入り口のところにある名札に、『カネコ』とカタカナで表記されているのを見て、ようやく知ったという具合であった。

しかし、カネコからは悪意というものはまったく感じられない。しいて言えば無関心であり、別に興味をもたれなくても、巖はまったく平気であった。

それどころか、かえって親しくされるよりはこちらのほうがいいのではないかとまで今では思っている。

人と付き合うのが苦手なのは巖もまた同じであり、それ故にカネコの態度にも不快感をまったく感じていないのであった。

「むう。あ、あ、あ、あ。くそ。へびがいる。ここには鯉節がいるんだ」

ベットの方から声がする。

思わず巖は、そのベットのほうへと顔を向けた。

さきほど聞こえた声は、もちろんカネコの声で、それは寝言のよ

うには感じられなかった。

つまり、今でもカネコはベットの上で起きているのであろう。  
いや、好きで起きているのではなく、眠れないのだろう。

おそらく、自分のキーボードを叩く音とか漏れる光とかのせいで

……、  
『……………どうしたの？』

突然、巖が目線をベットのほうへと向けたのを受けて、弥生がキーボードを叩いた。

ディスプレイ上の弥生の表情には、心配そうな感情が浮かんでいる。

『カネコさんが眠れないみたいなんだ。弥生お姉ちゃん、今日はこの辺にしておこう』

『待つて』

巖が文字を打ち込んだ次の瞬間には、弥生の文字がまた躍っていた。

何か重大な話があるかのような表情が、画面上から見て取れる。

『……………最後に驚かせようとしてただけど…………私、明日、桜島に配属になった』

『え？ それは……………』

『……………言葉通り……………明日から、私、島ちゃんと同じ第13小隊の予備パイロットになった』

その弥生の言葉を理解した巖は表情を一変させ「やった」とばかりに笑顔を浮かべた。

そして、ジェスチャーとして、弥生に健闘をたたえるように、拳を画面上の弥生へと突き出す。

それに答えるのは、弥生の笑顔であり、彼女もまた巖と一緒に生活できるということを嬉しく思っているということが見て取れた。

『やったじゃん弥生お姉ちゃん。おめでとう！！』

『……………ありがとう……………じゃあ、明日ね……………お休み』

ばいばい、という言葉を言うような口元の動きとともに、弥生の



姿がディスプレイ上から消える。

その、ディスプレイに映るのがメッセージボードだけになったあとでも、巖は「やった」とばかりに嬉しさを全身で表現していた。まるで子供のようなはしゃぎっぷり。

しかし、それも無理もないということなのだろう。

なんと言つても、あの弥生がこの桜島に来るのである。

いくら強がり言つて気丈に振舞つていても、巖にも弥生と一緒にいたいという感情があるのは事実なのだ。

それがここ3日間。弥生と面と向かつては相對する事はなかった。弥生の突然の報告に、心躍らないほうがおかしいといえた。

「明日昨日。ハンコがないんだ……………アー！！、ちくしゅ」

カネコの声で、巖は我にかえる。

それと同時に、少しはしゃぎすぎたかもしれないという自責の念とともに、巖はパソコンの電源を落とした。

途端、真っ暗になる部屋。

巖は、あくびをこらえるような仕草をしながら、自分も早く寝ようと、ベツトのあるカーテンの向こうへと向かう。

カーテンの向こうは静寂が支配しており、あらためて巖は、これではキーボードを叩く音でもうるさかったかもしれないと、自責の念にかられた。

あたりは暗く、カネコのベツトのあたりを伺い知ることができなかった。カネコが今どのような状態にいるのか分からない。

しかし、やはり一言謝つたほうがいいかな、という思いとともに、巖はカネコに対して謝罪の言葉を……………、

「あ、あのカネコさん。すみませんでした。うるさくしちゃったみ……………」

「なんでなんだよ！！！」

言葉の途中、突如としてのカネコの言葉。

さらには、その生身の体もまた巖の襟首を掴むために接近してお

り、突然の出来事に巖は、うわ、とばかりに短い悲鳴を漏らした。薄暗い暗闇の中、巖のベットの上でカネコが巖の襟首をつかんでいる。

そのカネコの様子からは興奮しているということがすぐさま見て取れ、もう少しよく凝視するならば、その頬をつたう涙の跡にも容易に気付くことができるだろう。

静かに泣き、そして納得できないとばかりに興奮している様子のカネコ。

そこからは昼間の、無表情ですべてに対して無関心であるかのようなカネコの様子からは、まったく想像することができなかった。

「あ、あのカネコさん……どうしちゃったんですか？」

襟首を絞められている巖は、動揺している様子で言う。

なにがなんだか分からないといったその声色は、目の前にいるカネコの行動へ。

しかしカネコは、その巖の言葉に答えることもなく、自分自身の独白を行い始めた。

「なんで……！！　なんでなんだ？」

繰り返す言葉に、はたして意味はあるのだろうか。

音量はそれほど高くはないが、その声からは絶叫のような気質を感じることができる。

そんな、カネコの言葉。

それは、巖に向けられているようで、しかし別の誰かに喋っているかのようだった。

錯乱しているわけではない。

確固とした意識は、ある。

げんにその瞳には、昼間では見ることでできない生気が浮かんでおり、本来のカネコの姿がここにあると言えた。

「なんで俺はこんなことやらずにちゃいけないんだ。死ぬのでもない。いや、死ぬのも同じか。自分が自分でなくなっちゃう……意味なんて……俺がやる必要なんてまったくないじゃないか！！」

「力、カネコさん？」

カネコの言葉はさらに意味不明なものに変わる。

それを理解できない巖は、ただただ困惑することしかできない。

目の前の……自分の襟首を掴みながら、昼間の様子からは考えられないような勢いでまくしたてるカネコ。

そこに何かの真実があるような気がして、巖はカネコが何を言うおとしていいのかを真剣に探り始める。

「無駄……無駄無駄無駄無駄。所詮、なんにもかも無駄で必要なくて俺がやらなくても誰かがやるんだ。そんなのホントにただ無駄で必要なんじゃないじゃないか……それに、怖い、怖いんだよ俺は。」

なあおい。俺、昼間とか今とか、なんか変なこと言っていないよな。あんな……あんなほかの連中みたいな、そんな訳の分からないこと言っていないよな？ 俺、まだ大丈夫だよな？ おかしくなんてなっていないよな？ まだ、俺は俺だよな？」

泣きながらの言葉である。

不安と恐怖に怯えているかのように、カネコの独白は夜の静寂を打ち壊す。

まるで魂そのものに訴えかけるかのような、そんなカネコの言葉。そこからは今のカネコの言葉が何かの悪ふざけでないことが見て取れ、巖はますます困惑するばかりだった。

「まだ……まだ俺は大丈夫だ。壊れてない。乗っ取られてない。そうだ。だってまだ3ヶ月しか経っていないじゃないか……まだ……まだ大丈夫。」

まだ？ そうまだだ。時間の問題だ……やめてくれよ。やだよ俺は。怖いよ。なあ、怖いよ。なあ、浩二……」

そこでカネコはハタと気付く。

目の前の人物が、自分の想定していた人間ではないことに。

それを認識したカネコの表情が、一瞬にして変わる。

驚愕から達観へ。

恐怖から無力感へ。

感情の进りから無関心へ。

一瞬にして流れた思考と感情の数々は、もうあいつはいないんだった、という感情をもって終結する。

カネコにとつて、かつて生活をとにした隣人は、今日の前にいる巖ではけっしてなかった。

カネコの顔には、昼間と同じような無気力と無表情が浮かぶに至る。

そしてその表情をもって、カネコは目の前にある巖の顔をみつめた。

ただ淡々と巖の顔を見つめるカネコの表情には、何か羨ましいものでも見ているかのような感じさえある。

人生の経験者である老人が、自分の孫を見るかのような、そんな眼差し。

その達観と渴望で彩られた感情は、当然に口にだす声色にも及んでいる。

「……お前は、知らないんだよな。幸せだ……うらやましいよ」  
それだけ言つてカネコは、巖の襟首を離す。

もはや感情の昂ぶりもなければ、涙も流していない。

その様子は、完全に、昼間のあのカネコに戻っていた。

いや、昼間よりも尚、無力感に苛まれていると言つたほうが正しいだろう。

最後の防波堤が崩れたというか、残っていたすべてのエネルギーを使つたかのように、その背中には疲労が見て取れる。

そしてカネコは、ノソノソといった具合に、自分のベットへと戻つていった。

何を言わず、巖のほうを振り返るうともしないで、カネコはそのままベットの中へ。

モソモソと入っていったカネコは、そのまま死んだように眠り始めた。

茫然自失といった状態なのは、巖のほうだ。

あたりには、さきほどまでとは比べようもない静寂がまい込んでいる。

周りには、暗闇と風のざわめき。

カネコのベットに入る衣擦れの音と、あとは無音しか聞こえなくなる。

そんな中で巖は、何かなんだか分からないという表情のまま、しばしの間ベットの上で固まったままだった。

（続く）

### 第三話

死ぬことよりも、自分が自分でなくなることの方が恐ろしい。

平成38年4月7日、日本、浮き島。

カネコのあの騒動から翌日。

朝になって、いつものように朝ごはんのしたくをしているカネコに対して、巖は昨日のことについて詰問していた。

巖としては、あの体の底を揺さぶるような慟哭に、なんらかの嫌な感じを見出しており、それを知るための詰問であった。

しかし結果は、煙にまかれるだけまかれて、適当に扱われただけ。なんでもない。というか昨日は寝ぼけていた。君には関係ない。じきに分かる。

巖にしては積極的に質問を繰り返していたのだが、返って来る言葉はそのようなものだけだったのである。

そんな返答では巖は到底納得できたものではなかったのであるが、しかしそれ以上の質問をするヒマもなく、カネコは舌打ちとともに部屋から出て行ってしまった。

そんなわけで、変なものが胸の中でくすぶり続ける巖であった。

納得は、今でもできていない。

なんだか、ソレをきちんと説明しておかないといけないという思いが、巖には予感としてあるのである。

昨日のカネコさんの様子は明らかにおかしかった……自分が自分でなくなるっていうのは、どういう意味なんだろう？

カネコの言っていた言葉。

その中での「恐怖」という単語については、巖としてもよく分けることだった。

つまりは、地球同位生命体との戦いで、命を落とすかもしれないということ。

ひよっとしたら、死んでしまうかもしれない。

その恐怖は、少なからず巖の中にもある。

しかし「自分が自分でなくなってしまう。まだ俺はおかしくなっていないよな？」といった言葉の意味が、巖にはまったく理解できないのである。

何か自分の知らない事があるのではないか。

それは、この桜島全体に流れている停滞というか無関心みたいなものに、関係があるのかもしれない。

そう仮説づけたところで、巖は我に返った。

自分の思考に沈殿しているうちに、周りの情景が目の前から消えていた。

今、ようやく自分の周りの状況を認識するに至った巖は、その状況を言葉にして、自分のいる場所を整理する。

「そうか、『箱庭』のドックで、『箱庭』を眺めていたんだっけ……」

巖の言葉の通り、そこは第13小隊の『箱庭』が並ぶドックだった。

全長15メートルの鉄の塊が、巖の目の前には5体ある。

『人型』の、一昔前のロボットじみた形状。

重厚なその作りは、見る者の心を圧倒し、非現実の世界へと連れ込んでいく。

こんなものが二足歩行を行うことができるのだから、やはり科学力というものはすごいな、と巖は考えてみる。

その、『箱庭』が並ぶ大きな建物。

朝、カネコに昨日のことを詰問して、けんもほろろな扱いを受けた巖は、なんのきなしにこの場所に來たのだった。

「『箱庭』か……」

昨日のカネコの言葉は、明らかにこの『箱庭』関連なのということが、巖にも理解できている。

それだからこそ、こうしてこの場所に来たというわけなのだが、しかしその先が続かない。

誰か他の人に話しかけてみようとも思ったが、あいにくと周りには整備の人も含めて誰もいなかった。

ただっ広い空間に一人つきり。

いや、一人きりでもないか。

そう、目の前に、いる。

人ではないが、しかし人の形をしているものが。

全長15メートルの、鉄の塊。

『箱庭』が、いる。

と、その時だった。

人一人いないその場所に、巖のものではない足音が聞こえた。

それはこのドックの入り口付近から。

カッンカッンという足音とともにこちらにくるのは、4日前に巖に桜島行きを打診した中年の男。

その姿は第13小隊の部隊長である、ヒョウドウであった。

「ヒョウドウさん!!」

巖がヒョウドウの目の前に行き、叫ぶ。

その表情は真面目という一言。

巖は、このヒョウドウであるならばカネコの変調を説明できると考えているのだ。

「……………」

しかしヒョウドウは目の前の巖を、冷たい眼で見据えるだけだった。

その姿は、背が高く、細い枯れ木のような印象。

険なる感情が表情の8割がたを占めており、見る者を威圧させる



のに十分だった。

「あ、あのですね……質問というか、カネコさんのことなんですけど……」

「……カネコ？」

「は、はい。カネコさんなんですけど……昨日……」

「……」

言いよどむ巖。

それをヒョウドウは、冷たい目つきのまま見据える。

まるで足元を駆けずり回るアリでも見るかのような、そんな無機質な目付き。

無感動と無関心と無気力の三重苦が、今、ヒョウドウの瞳を通して巖を圧迫し続けている。

そして巖は、そのヒョウドウの目付きが恐ろしく、さきほどから俯いているままだった。

このような体験が、今まで巖にはなかったのである。

過去、巖が誰かに意見を言う時にも、横には常に弥生がいた。

というか、そもそも人に意見することさえ、巖としては皆無なことなのである。

一人だけで、このように人に意見することなど、今までの巖の人生の中で一度もない。

その経験のなさと生来の性格の弱さがあいまって、巖はそれ以上、言葉を繰り出すこともできずに、モジモジとするだけだった。

「あ、あの……」

普段であるならば、すでに体は固まり、逃げ出してもいいころあ

い。  
しかし巖は、なけなしの勇気を振り絞って、ヒョウドウと相対した。

それほどまでに、巖は昨日のカネコの様子に何か引っかかるものを感じていたのであろう。

体が震えることにさえ気付かない様子で、巖はヒヨウドウに対して言葉を続けた。

「こんなことをここで言うのも、なんか嫌なんですけど、カネコさんの様子が変なんです……なんというか、急に夜中、泣き出して、それで……」

「……………」

「自分のやっていることは無駄だとか必要ないとか……自分が自分でなくなってしまう、とか……それに……」

「……うわごとは？」

「え？」

「何か、おかしい言動をしてなかったか？」

冷たい視線はそのまま、巖を見下ろすような形でヒヨウドウは言葉をつくる。

このような形で、ヒヨウドウから口をきいてもらったのは初めてだったので、巖は、しどろもどろになりながらも、  
「いえ……………」

あ、でも。おかしい言動、っていうのであれば、僕がこの桜島に来て初めてカネコさんに会った時から、なんか文脈が繋がらないような、変なことを突然しゃべったりはしてましたけど……」

「……………そうか」

巖の言葉を聞いたヒヨウドウは、脇に抱えていた書類に、何かを書き記し始めた。

その表情には諦めというか、達観。

まるで、それまでも繰り返してきた事柄を、情性において続けているかのような、そんな様子が見て取れた。

そんなヒヨウドウを見て、巖はしかし途方にくれる。

巖にしてみれば、カネコが、うわごとだろうが、おかしい言動を  
していようとどうでもいいのだ。

気になるのは、あの言葉。

お前はまだ知らないんだな。

自分が自分でなくなる。

という言葉の意味について知りたいだけなのだ。

ヒョウドウは書類に何かの事項を書きながら、左手に巻かれている腕時計をチラッと見た。

それと同時に、ボールペンを走らせる速度が高まる。

なにやら急いでいるような印象で、巖としては、とにかく早く質問しなければ、と気が焦るのであった。

「あ、あの、ヒョウドウさん」

「……………その話は後で聞こう。あと少しで集合だ」

「え？」

「地球同位生命体が茨城県大洗市に現れた。じきに出動命令が下る。だから、集合だ」

それだけ言つて、ヒョウドウはボールペンを走らせるのをやめる。

そして早々に、司令室へと歩き始めた。

カツンカツンという無機質に響く足音を残しながら、泰然と。

「それと、ナカハラヤヨイがもうじきこちらに到着する。お前は彼女と親しいんだろ？ 当面の案内は頼んだぞ」

「ま、待つてください。ヒョウドウさ……………」

「くどい」

今度こそ、ヒョウドウは止まらなかった。

歩みを進める勢いを増し、即座に司令室の方向へと姿を消す。巖はその後ろ姿を、ただただ見つめるだけしかできなかった。

第13小隊の『箱庭』とその本パイロットは、出動命令に従つて、茨城県大洗市へと出発していった。

軍用の輸送ヘリが、桜島を出発したのが40分前の出来事。

予備パイロットの面々は、いつものように桜島にて待機。

本パイロット達が桜島から出発した今となつては、予備の連中にはなんら仕事という仕事はなかった。

ドックの一室にある、戦況を伝える大きなモニターのある部屋で、第13小隊の予備パイロットたちは、さきほどからその戦闘を観察しているだけ。

目の前で展開されている『箱庭』と地球同位生命体との戦いを、無関心の眼で見据えるだけであつた。

そんな第13小隊予備パイロットの面々の中には、巖と弥生の姿がある。

心ここに在らずといった様子の巖と、それを心配そうに覗いている弥生。

巖は、自分にあてがわれたソファアに座り、ただ視線をモニターのほうに置いていただけだつた。

「……………」

巖の様子は、まさしく忘却自失という有様。

目線は尚もモニターに向けられているが、しかし心は沈殿している。

考え、こんでいる。

何か引つかかるものを感じる。

それは、昨日のカネコの変調もそうだが、それに加えてさっきのヒョウドウの一件に関しても……、

なにやらよく分からない、モヤモヤとした感情が巖の胸を漂い、そして心を迷わせていた。

自分がここにすることへの迷い。

場違いな、自分の存在がここでは浮いているような、そんな雰囲気。

思えば、桜島に來たときから、ここはちょっと変だつた。  
人類の最前線基地。

そこで戦う者というのは、もっと熱いというか、活気に満ち溢れ

ているものではないのか？

明日への希望を夢見て、いつかくる地球同位生命体を討ち滅ぼす未来を渴望する。

未来。

そう、未来だ。

いつの日か、平和な世界を。

地球同位生命体に恐怖して震えるしかできない日々を、いつの日にか克服する。

そのための戦い。

そのための桜島。

そのための

『箱庭』

だというのに、この島に溢れているのは、達観と無関心と無感動。皆の表情は諦めと無表情によって覆い尽くされていて、未来を夢見るなんていうものは、いつこっに見えてこない。

なんなのだろう。

これは自分がおかしいのか？

この自分の考えは青臭くて、常に命をはることになるパイロットには、このような態度になるのが、それが正しいことなのだろうか。……いや、でも、ボクにはどうしても、そうは思えない。

巖は内心にこもりながら、ギリッと歯軋りを鳴らした。

自分の力不足というか、この場に参加していない自分への責めをも足し合わせて、やり場のない怒りが巖の中では渦巻いていた。

このような巖の態度は、この桜島に来る前には考えられなかったことだ。

怒り、などという感情は常日頃何ごともなく過ごすのには、まったくの邪魔な存在。

自分の意見など言う必要もなく、ただ周りの人間の意見に同意していればいい。

盲目的な自動人形。

そこに言葉はあっても、意思はなかった。

それが、今では自分のやり場のない感情に、怒りを覚えているのである。

これが進化なのか退化なのか。

それは本人を含めて誰にも分からないが、しかしその変化を快く思っていない者がいるということは事実。

巖の横で、さきほどから言葉一つしゃべらない巖のことを心配そうに見つめる一人の女の子。

いつも巖の横で面倒を見てきた人形使い。

中原弥生としては、そんな巖の変わりぶりを、素直に喜べるはずもなかった。

「……………島ちゃん」

「……………」

「……………島ちゃん!!」

「え？ あ……………な、なに？ 弥生お姉ちゃん」

普段はださない音量の声によって、やっと巖はこちら側の世界へと帰ってきた。

その顔にはなんだか取り繕うかのような笑顔が浮かべられており、弥生としては、むっと不機嫌になる要素として十分だった。

無表情な顔色の中にも、少しだけ怒りのニュアンスが加わっている弥生。

しかしそれもほんの微量なものであり、普通人からすれば、その感情の機微を感じ取ることはできないだろう。

だが、巖と弥生の付き合いの長さを考えれば、それだけの意思表示のみで、怒りの感情が十二分に相手に伝わるのであった。

「……………なんだか、様子が変……………何かあった？」

「え？ う、うん……………でも大丈夫。なんでもないよ」

「……………ホント？」

「うん。ほんと、ほんと」

無表情をもって、巖のことを、じーと見つめる弥生。

そこには沈黙という名の迫力があって、いつもの巖であるならば、

それだけで己の本心を暴露するに至るのであるが、なんとか我慢した。

余計な心配はかけたくない。

それに、まだこれは自分の感じているだけの疑念であるかもしれないのだから、いたずらに弥生お姉ちゃんを巻き込むことはあつちやいけない。

そのように考えた巖は、尚も、自分を見つめてくる弥生を、苦笑いを浮かべて見返した。

なんでもない、と。

自分は大丈夫だ、と。

「……………」

それを見て、弥生は、ふう、とばかりに嘆息。

彼女としてみれば、なんでもいいから巖には自分に頼ってもらいたいのであるが、しかしとうの巖本人がこのような感じなのだから仕方がない。

若干の寂しさと物足りなさを感じながらも、弥生は巖から視線をはずし、今も戦闘が続いているモニターを見据えた。

そのモニターに映るのは、あいも変わらずに戦闘風景。

第13小隊と地球同位生命体との壮絶な戦いだった。

音声は、ない。

ただ、映像だけが流れてくる。

今回の戦闘では、地球同位生命体の数が少ないということで、第13小隊単独での戦闘である。

『箱庭』5対と、『爬虫類型』の地球同位生命体3体の戦い。

海の近くの人気のないところを選んで巣を作り始めていた地球同位生命体との戦いは、いよいよ大詰めになってきたといえよう。

陣地に立て籠もり、防御に徹する地球同位生命体3体を、『箱庭』は遠方からのライフル射撃をさきほどから慣行していた。

近くにあった木々や壊した家々の材料でつくったその巣は、段々と壊れていき、今ではあと少しでその巣を破壊できるところ

まできている。

あとは時間の問題。

ここまでくれば、戦況は明らかに『箱庭』側の勝利だといえた。

「……………島ちゃん……………島ちゃんの乗る『箱庭』って、あの式番艦なんだよね？」

「う、うん。そうだよ……………弥生お姉ちゃんは、参番艦の予備パイロットになったんだよね？ 確か」

「……………そう……………急に昨日言われたの……………まだ、本パイロットの人とは会ってないんだけど……………」

「え？ どうして？」

「……………ここに来て、すぐにこの戦闘だから……………会うヒマ、なかった」

「あ、そっか……………」

弥生の言葉に「しまった」とばかりに表情を変える巖。

そうなのだ。

弥生は今日の朝、初めて桜島に来たのだ。

それなのにも関わらず、自分は弥生お姉ちゃんを出迎えるでもなく、それを喜ぶでもなく、ただ自分の悩みに悩んでいるだけだった。不慣れな桜島。

それも、到着したと思ったら、いきなり戦闘なのである。

戸惑うのも無理はなく、それをサポートするのが、桜島に先に来ていた自分の役割ではなかったか？

そう認識した巖は、遅くはなったが、弥生のサポートをする決心をする。

まるでいつもと役割が違った感じに、少しだけ自笑を浮かべながら、弥生に向かって言葉を投げる。

「それで、来てそうそうだと思うけど、桜島の感想はどう？ 僕もまだここに来て4日しか経ってないから、弥生お姉ちゃんと境遇は変わらないんだけど……………僕はここいいところだと思うよ、勿論、浮き島も好きだけどさ」



「……………うん、私も好き……………やっぱり、自然が多いと、安心できる」

「そうだよな。うん。ここは空気もおいしいし」

東京という町に、そこまで適応できていなかった2人だった。

人の塊。

人のゴミ。

アスファルトで覆われた世界。

壊れた空。

思えば、それらの要因も、この2人があそこでうまくやっていけなかった原因なのかもしれない。

「……………島ちゃん……………島ちゃんの『箱庭』……………式番艦……………動きがおかしくない？」

モニターを見る弥生が、巖に言った。

そこに映されているのは、変わらずに戦闘シーンだ。

すでに地球同位生命体の巢はことごとく破壊されている。

3体の地球同位生命体。

そして、その『爬虫類型』の敵が、今まさにそこから這い出てきて、『箱庭』へとむかって死の行進を始めたところだった。

その状況を見ての、弥生の言葉。

その言葉はその通りで、カネコの乗る式番艦はなにやらおぼつかない足取りで、突進してくる地球同位生命体に対応している。

「ホントだ……………なんだろう。ノアに何か異常でも発生したのかな……………」

5体の『箱庭』が隊列を組んで、地球同位生命体を迎え撃とうとしているなかにあつて、カネコの乗る『箱庭』の動きがぎこちない。上体がよろめいている、という表現が近いだろうか。

生体制御の必要もないような『箱庭』の操縦方法の中で、パイロットの操縦ミスというのは考えにくい。

ならばということで、問題があるのはパイロットではなく『箱庭』

にあると思つた巖である。

「あ、でも大丈夫みたい。ほら、なんとか隊列も整つたし」

モニター上には、巖の言葉通り、なんとか隊列を組み、地球同位生命体を迎え撃とうとする5体の『箱庭』の姿があつた。

もとより、『箱庭』側が優勢なのには変わりはない。

地球同位生命体作りかけの巣から出てくるというのは、単に苦し紛れの行動なのだ。

そこに統制のとれた『箱庭』の攻撃が加えられればどうなるか、それは火を見るよりも明らかだつた。

「……………終わった」

一瞬、だつた。

隊列を組み、一点集中を可能にした『箱庭』のライフル一斉射撃。たつたの3斉射目で、3体すべての地球同位生命体は地へと崩れ落ち、絶命した。

「あ、本当だ……じゃあ、あとは本パイロットと指揮官の人たちが戻ってくるまで、自由行動だね。どうする？ 弥生お姉ちゃん。どこかで昼ごはんでも食べてくる？」

「……………ん」

肯定の意思表示を見て、巖は一つ頷く。

ではでは、と。

桜島に先に来ていた自分としては、弥生を食堂まで案内しないといけない、と。

そのように意気込みながら、さりげない感じで、巖は弥生の手をとり、部屋の出口へと向かつた。

巖島巖と中原弥生との出会いは、丁度、巖が2歳の時分まで遡る。

家が近所で、親どうしも、大学のゼミが一緒だったとかで仲がよかったのだから、巖と弥生が仲良くなるのも当然だったといえよう。物心ついたときから一緒だった2人。

周りの人間は、そんな2人をして、本物の兄弟のようだ形容したものだ。

いつも一緒に、離れることを知らない。

かたときも2人が離れるということではなく、そしてそれは小学校、中学校と変わることはなかった。

幼馴染といっても、限度がある。

そのような関係は明らかに異常だった。

異常。

だから、2人の関係は、異常以外のなにものでもなかったのだ。親からの愛情をあまり受けてこなかった弥生は、その対象を巖へと定めた。

これは意識的なことではなく、むしろ無意識。

承認願望という、誰から認められたいという欲望の肥大化した弥生は、その対象を巖へと定めたのである。

自分にとって都合のいい存在。

常に自分に逆らうことなく、いつも自分のことを認めてくれる。

そんな都合のいい存在へと、弥生は巖のことを無意識のうちに『教育』していった。

自分の意見を言わない。

行動を起こすにも誰かからの承認を受けないと……弥生の承認を受けないと行動することができない。

まるで母親と赤ん坊のような関係。

それが、浮き島に来るまでの、巖と弥生の関係だった。

その関係が崩れはじめたのが、8ヶ月前。

巖が突然、『箱庭』に乗りたいたいなどと言いはじめたことが発端だった。

弥生は、そんな巖の言説に、何度も何度も反論し、反対した。

こんなことがあっていいはずがない。

島ちゃんが私の意見を聞かないはずがない。

私の意見を島ちゃんが認めないはずがない。

そう確信しての反論は、しかし無残にも失敗に終わることになる。

巖の意思が、弥生の『教育』に勝ったのだ。

それから、巖は浮き島への試験を受けるための準備をはじめ、そしてソレに弥生もならった。

巖にとっても弥生と離れるのは苦痛だったが、しかしそれ以上に、弥生にとって巖と離れるというのは文字通りの死活問題だったのだ。かたときも離れることを知らず、

いつも一緒に行動してきた巖と弥生。

いつのまにか、どつぷりと依存関係にはまっているのは、巖ではなく弥生であった。

それから8ヶ月。

試験にも無事合格してしまった巖と、それを追う弥生。

こうして幼馴染の2人は浮き島へと来ることになり、その人生を終わらすことになる。

幕はとうにあがっている。

無知という名の幸せな日々は、これにて終幕……。

昼ごはんを食べ終え、満腹となって『箱庭』のドックに帰ってきた巖と弥生を待っていたのは、輸送ヘリからすでに降ろされ、元の位置に並んでいる『箱庭』の姿だった。

全長15メートル超の人型決戦兵器が、ローラー付きの機械に乗せられ、このドックの中で横一列に並んでいる。

その目には、今だに『箱庭』が起動していることを知らせる、黄

色の光が宿っていた。

まだ、『箱庭』は起動している。  
動ける、状態だ。

つまり、まだ『箱庭』の中にパイロットが残っているのである。  
『箱庭』を動かすことができるのは、ひとえにパイロットの意識を『箱庭』へと移すから。

それを可能にするのには、人間と『箱庭』をつなげる神経伝達ケーブルだ。

その断裂と意識の回復方法を間違えれば、パイロットの意識は人間へと戻ることなく、その人間の形はただの入れ物へと成り下がってしまう。

『箱庭』の起動を終了させるのには、最新の注意が必要。  
だからこそ、それはこの桜島の設備の整ったところで行われるのである。

「……………やっぱり、大きい」  
声をあげたのは、弥生だった。

浮き島で練習機を何度となく見てきた弥生であったが、やはり5体もの機体が並ぶさまは、壮大という一言なのだろう。

その目には、圧倒されている者の感情が浮かんでいた。

「うん。僕もまだ、この光景には慣れないというか、圧倒されるよ」  
2人が顔をあげ、はるか上に位置する『箱庭』の頭部を見上げる。  
第13小隊、四番艦の『箱庭』の頭部だ。

青色の全体像。

人型の、ロボットじみたフォルム。

横に広がっている形状の目は、やはり黄色に染まっており、『箱庭』が今だに起動していることを教えてくれている。

と、その黄色の光が、いきなり消えた。

『箱庭』の目は黄色から黒へ。

まるで瞳に光のなくなった人間のように、その様子は死人のそれだ。

起動から待機状態へと移行した『箱庭』

つまりは、『箱庭』とそれに乗っていたパイロットの結合がとかれたのだ。

巖はその四番艦のコックピット付近に目をやる。

『箱庭』の胸の部分、そこにあるコックピット付近に、鉄の足場ができていた。

足場とその周りを囲む鉄網。

それがクレーンのようなもので吊るされ、『箱庭』コックピット付近に停止している。

その、鉄の足場。

空中に固定した足場の中には、医師が足の踏み場もないような感じにこった返していた。

パイロットと『箱庭』との結合関係を解くための設備とともにそこに集まっている者達は、全員が白衣姿。

パイロットの神経系を『箱庭』から人間へと戻すことを仕事とする、専属の医師達だ。

それら白で彩られる医師達が、四番艦だけでなく、第13小隊すべての『箱庭』のコックピット付近に存在していた。

一つの『箱庭』ごとに5人ほどの医師の数だろうか。

大きな機械類。

それを接続する者。

操作する者。

それらの白衣姿の者達が、細心の注意を払いながら、パイロットと『箱庭』との結合を解いていく。

慎重に、そして大胆に。

その様子は、さながら外科手術のような様相を呈していた。

そんな様子を見て、巖はなにやら安心感のようなものを感じる。

少なくとも、この結合関係を解く時点では命の危険はないだろうと。

そう思い至った巖は、体の底から勇気が湧き出るのを感じていた。信頼できるスタッフ。

そして敵は人類の敵、地球同位生命体。子供っぽい巖の考え。

それは単純なヒーロー願望なのだろう。

それを考えついた巖の表情には、希望に満ちた満面の笑みが浮かべられることになる。

ニコニコと、希望に目を輝かせて、子供のように笑顔を浮かべる。楽しいというよりは、このすばらしい現場に自分も加わることができるという満足感。

それを感じる巖としては、顔に浮かぶ笑顔を止めることができなかった。

そして、その表情をそのままに、巖はふと視線を横へとずらす。

その視線を、『箱庭』へと。

自分が乗ることになるかもしれない『箱庭』へと。

第13小队、式番艦の『箱庭』へと。

カネコがさきほどまで乗っていた『箱庭』へと。

「え？」

疑問詞は、巖だ。

見据えた先、つまりは式番艦の『箱庭』にだけ、他にはない様相があった。

そこだけ、他よりも医師の数が多い。

慌しくも動く、医師達の群れがいきりたっている。

どこかに連絡をとる音声と、諦めと達観。

そして、その地上では、一つのものが用意されていた。

それは、担架、だ。

人を運ぶための、担架が、式番艦の下に用意されている。

ドクン。

はじめに「なんのために？」と巖は思った。

その担架はなんのために……。

決まっている。担架はケガ人病人を乗せるための物だ。それ以外の何物でもない。

次に「誰が？」と思った。

その担架に乗るのは、誰だ、と。

決まっている。担架のあるのは式番艦の下。この状況下。誰がそれに乗せられるのかなど、とうの昔からの決定事項。

さいごに「なぜ？」と問いた。

何に対しての「なぜ？」なのかは巖にも分からない。

単なる時間稼ぎ、受け止めることのできない現実への逃避。

つまり、カネコが、その、担架に、乗る、と、い、う、  
こ、と。

「カネコさん！！」

叫びとともに、巖は駆け出していた。

嫌な予感が最初からあった。

それは昨日のカネコの変調から覚えた感触であったが、それはこの桜島に来たときから持っていたことなのだろう。

いや、もしかしたら、浮き島に来たときから何か違和感を、巖は受けていたのかもしれない。

無気力な教師陣。

無感動な指揮官。

ただ事務的に『箱庭』に乗るパイロット。

そして何より、浮き島に、200人も人間がいるという事実。

必要ない。

必要ないのだ。

そんな数は必要ない。

必要ないはずだ。

浮き島に来て、『箱庭』パイロットの死亡率がそんなに高くないことを始めて知った。

死亡率は高くない。



パイロットは死なない。

欠員など、そんなに簡単にでるはずがない。  
200人。

なぜ、200人もの人間を試験に合格させる必要があったのか。  
なぜ、『箱庭』に乗ると生きて帰れないなどという噂がたっているのか。

なぜ、『箱庭』に乗っている人間は、わけの分からない、  
脈絡のないことを喋りだすのか。  
走った。

巖は走った。

その視界の中、式番艦のコックピットの中から、カネコが取り出される。

取り出される。

物のように、取り出される。

けれど、生きている。

生きている。

そう、生きている。

カネコの体が動くのが見える。

外傷もない。

生きている。

死んでいない。

死んでいない。

生きている。

生きている。

生きている。

生きている。

いきている。

いきている。

いきている。

いきている。

[illegible]

生きている、  
ただだった。

「うにゃあああ。うみねこが鳴く頃には神様が現れそして母さん僕はもう元気だと言うのは神社の境内の中で鮎の塩焼きなんだなああ！！ はははは、くっくううううく…… ひゃあああ。パソコンをミロええいとアハハハハ……うううううう」

絶句、した。

巖は、絶句した。

訳の分からない言葉を今も継続して喋っているのは、カネコだった。

メガネがいつものようにかけられている。

姿も身長も、変わったところは見られない。

しかし、変わっていないところはそこだけだった。

その顔には形容のできない表情が浮かべられている。

赤ん坊。

大人の気持ち悪い目。

達觀と渴望。

一点の曇りのない、だからこそ曇っているということができそうな笑顔。

そして、口からでるその言葉。

言葉。

言葉。

言葉。

それらはまったく意味を持たずに、ただただ虚空へと投げ出されるばかり。

意味のとおらない、理解のできないそのカネコの状況。

それを見て巖は、心配という感情よりも恐怖という感情のほうが早くきた。

「カネコ……さん？」

「本と古典をhミガキgにくわあああああはああ！！

ラクガキ色の、ばー、ばー、ばー。やいくる」ふおか富士山におこかかかかかかか明日の意味が電光とうだおと思った」

見間違いでも、何かの間違いでもなかった。

カネコの姿は、そのまま。

形容し難い笑顔を浮かべながら、訳のわからない言葉を喋り続けるだけ。

「……………カネコ、さん」

呆然とするしかない巖。

それを邪魔そうにしながら、白衣姿の医師達はカネコを担架へと乗せて、移動を開始する。

茫然自失。

何も考えることができない。

巖はただ、でくの坊のようにそこに立ち尽くすだけ。

終わった。

平和の上にあぐらをかき、犠牲の上に成り立っていた幸せを享受する日々は、これで終わった。

待ち受けるのは、灰色の闇。

真つ暗な、というわけではない。

光はきちんと存在する。

被害者、というわけでもない。

救いはちゃんと存在する。

すべてが悪いことでもなく、一極の意味には収束させることはできない。

目の前に広がるのは、屹立とした灰色。

燦然と輝く世界はすぐ隣に。

ぬるま湯の中に、巖は足を踏み入れた。

（続く）

## 第四話

「原因は……不明よ」

言葉を放ったのは、桜島医療所の女医師、タカダであった。

短く切りそろえられた黒髪と理知的な瞳。

巖とは面識のあるタカダが、巖、弥生に対して、カネコの一件を説明しようとしている。

あの後、カネコは所定のマニュアルどおりに、医療所のほうへと運ばれた。

担架に乗せられ、なすがまま、といった様子であったカネコ。

そんな言っなければ、赤ん坊のような状態だったにも関わらず、カネコはあいも変わらず訳のわからない独白を続けていた。

意味の分からないような、文脈の繋がらないような言葉を、カネコは担架に乗せられながらも喋り続け、そしてそのまま病院へ。

その様子は明らかに異常で、常軌を逸しているというのがすぐさま見て取れる有様。

表現に苦しむような……一言で言えば気持ちの悪い表情を浮かべながら、カネコはそのまま医療所へと直行したのである。

その、担架に乗せられ、医療所に運ばれるカネコを、巖と弥生は追った。

自然と、というのが正しいのかもしれない。

カネコの豹変。

それを目の当たりにした巖と弥生が、そのまま何事もなく日々を生きられるはずもなく、このようにカネコの姿を追って医療所までやってきたのは、至極当然な話だといえよう。

カネコはそのまま医療所まで運ばれ、一応、という形で手術室に運ばれた。

勿論、そこまで巖と弥生が入れるわけもなく、2人はその手術中のランプが灯っている手術室の前で、無言のままに待つことになっ

た。

所在なさげに、何が起こったのか分からないといったように、困惑した表情でそこで佇む2人。

そこに、タカダとヒョウドウがともに現れたのである。

事情を説明する、というヒョウドウの言葉と、あゝあ、もうか、という具合に嘆息するタカダの姿。

突然の出来事にどうしたらいいのかわからなかった巖と弥生は、ヒョウドウの言葉に何も反抗することなく、それに従った。

そして案内された部屋が、今、巖と弥生がいる部屋なのである。部屋の中。

そこには、巖と弥生、そしてタカダとヒョウドウの4名がいた。普段は何かの会議などで使う部屋なのである。

前方、タカダの立っている場所の頭上には、スクリーンが設置されており、映写機のようなものまで見て取れる。

巖と弥生が座っている椅子も、そこらの安物ではなく、皮製の高価そうなもの。

そんな、来客のためのような対応に、本来ならば違和感を覚えるのが普通なのであるが、しかし今の巖と弥生にそこまでの余裕はない。

目の前で展開され始めた、タカダの説明を熱心に聴くこと以外には、今の2人の脳裏には何もなかった。

「『箱庭』が創られたのは、今から5年前。アメリカが壊滅し、その研究者が日本に移住してきたのが契機だったわ。トマス・マン博士。彼とその助手、そして日本の研究者のもとで、誰でも操縦できて、地球同位生命体にも対抗しうるような兵器の開発が目指された」

タカダの口調は、堅い。

巖と医療所で相対した時とは考えられないような堅さが、声と表情に浮かんでいる。

しかし、それも無理からぬことなのだろう。

彼女がやろうとしていることは、ひとえに巖と弥生の希望を壊すものであるのだから。

精神の死。

いふなればタカダは今、人を殺している最中なのであった。

「それまでも、現代兵器の有効性は認められていたの。地球同位生命体に対して、ミサイルを撃ち込めば殺すことができるし、小型小銃であつても何発か弾を撃ち込めば、殺すことができた。

でもね、奴らは『個』としての特性はもってなかったの。言うなれば、植物みたいなもの。自分が死んでも、種となる群体が無事ならばヤツらにとっては勝利。そんな中で、目の前の地球同位生命体1体を殺しても何にもならない」

タカダの喋る言葉は、巖としてもよく知っている知識だった。

それは地球同位生命体の基礎知識。

個としての活動ではなく、群としての活動。

そして、そこからくる地球同位生命体の数の多さ。

1体を殺すことができて、その後の地球同位生命体を殺すことができず、今度は自分がヤツラに殺される。

移動速度の違い。

陸戦ではそれ故、軍隊による攻撃は初期段階で不可能であると判断された。

だからこそ『箱庭』。

攻撃力と移動速度をかねそろえた存在。

それを備えた、『箱庭』という兵器が必要だったのである。

そのことを理解していた巖は、タカダの次の言葉を予想し、その先を口にした。

「生身での戦闘は不可能で、戦車などの外的兵器を使つても、その移動速度故に地球同位生命体という『群』には対抗できない……だから『箱庭』が開発された、って、そういうことですよね？」

「そういうこと……それで創られたのが『箱庭』。

人間の神経系をすべて『箱庭』へとトレースすることによって、

自身が『箱庭』となつて行動する。だからこそ……だからこそ、こんな問題が起つてきたというわけ……」

「……………」  
歯切れの悪い感じに、弥生と巖は顔をしかめる。

タカダの様子には、何かそれ以上、話を進めたくないという意思を見ることができ、煮え返らないように言葉を曖昧にするだけだった。

ぎり、という具合に歯を食いしばっているタカダ。

白衣姿の女医師は、苦しそうな表情で、それ以上の言葉を続けることができないようだった。

そんなタカダに、ヒョウドウは、

「タカダさん。早々に話を進めていただきたい。もう誤魔化すことはできない。ならばここで説明してやるのが、せめてもの道義でしょう?」

違いますか? という表情とともに、そう言ったヒョウドウは、いつものように無表情だ。

冷たい声色と、冷たい瞳。

それらがタカダを睨みつけ、とつと話を進めると暗に示していた。

それに対して、タカダは、むっとした表情を作りながらも、しかしヒョウドウの言葉の通り、話を続ける。

「『箱庭』計画の初期段階、『箱庭』開発中にそれは起こった……。実験段階、その『箱庭』のテストパイロットの……頭がおかしくなったの」

「頭が……おかしく?」

「頭がおかしく。精神が狂って。気が違って。気が狂って。その人がその人ではなくなる……」

ここでもう一度、タカダは言葉を濁す。

しかし、今回はその時間は短く、意を決したような顔つきになったタカダは、その次を口にした。



「パイロットの精神が……『箱庭』に移り移ってしまう。」

通称『同化現象』。これが起こると、そのパイロットの意識や記憶がすべてなくなってしまうの」

「え？ 同化……ですか？」

「そう、同化……神経系をすべてリンクさせて『箱庭』を動かすわけだけど、それが戻らなくなっちゃうのよ。」

うつん、正確に言うなら違うわね。『箱庭』に移していた神経はもとのパイロットに戻る……戻らなくなるのは、そのパイロットの精神……とでもいうのかな、魂とか……非科学的だけどね」

「精神……魂……」

巖は、そのタカダの言葉に、どう反応していいものか分からないように困惑した様子だった。

まるで、荒唐無稽なその話。

精神がなくなるなど、あまりにも漠然としすぎていて、逆に実感がわかない。

つまりはどういうことになるのか、という眼差しをもって、巖はタカダに視線を向けた。

「つまり……パイロットの自意識がなくなるってこと。自分を自分だと認識することがなくなる……というか、早い話が、その人がいなくなるということ」

「いなくなるって……だって、カネコさんは、その『同化現象』とかいうのにかかってても、変わらずに存在していたじゃないですか……いなくなっただけなんかない……」

「ごめんなさいね、言葉が足りなかったわ。」

物質としての存在がなくなることじゃないのよ。自分を自分だと認識できなくなる……意識がなくなるっていうのは、文字通りの意味だね。何も感じないの……何を見ても何も感じない。何を聞いても何も感じない。何をしても何も感じない……自分がここにいるということが分からない。というかそもそも認識する主体がそもそもいないってことなの。何も感じないということすら感じない

「……というか……」

「……………」

「『箱庭』に乗ると、自分の意識は、自分を人間としてじゃなくて『箱庭』そのものだとして認識するでしょ？　それがそのまま続くのよ。戻らない。意識は、元の人間の入れ物に戻らない。」

「だから、その『同化現象』のあとの人間に残っているのは、何も無いってこと。精神の……魂の残滓とでもいうのかな。とにかく以前の……今までの自分ではない　　自分が自分でなくなってしまう」

「……………それって」

今まで沈黙を守ってきた弥生が、小さな声で反応した。

その顔にはいつものような無表情が浮かんでいながら、絶望を信じたくないという焦燥感とでもいえるべきものが浮かんでいた。

「……………それって……生きてるけど……死んでるってこと？」

「……………そう、その通り」

タカダが沈鬱に答えた言葉に、弥生は息を呑むように絶句した。目が見開かれ、いやいやをするように首を横に振る。

絶望が、

その表情には見紛うことない、絶望が浮かべられていた。

「え？　え？　どういうことですか？」

そんな弥生とは異なり、今だに状況が分かっていない様子の巖。

ある意味、最後まで幸福であるこの男に、その場にいるもつとも冷たい男が引導を渡した。

「お前が『箱庭』に乗る限り、いつかはこの世からいなくなるってことさ。」

肉体的な死ではない。しかし、お前をお前だと認識させている記憶という記憶がすべてなくなる。思考は混濁し、というかそもそも元の人間の入れ物に、お前という存在は戻らない。

つまり早い話が、今この場にいるお前が、いなくなるということだよ」

声色の一つも変えずに死刑宣告をしたヒョウドウ。

眉すら動かさず、表情にはなんら変化はない。

感情というものが、この男にはあるのかという疑問。

その疑問を疑問として抱くだけの余裕のある者などこの場にはいなく、ヒョウドウのその言葉によって、今度こそ完全に室内の空気は凍りついていた。

「じゃ、じゃあ……」

声がかすれている。

希望を今だに失いたくないがために言葉を放とうとする巖は、それ故に最後の光まで失うことになった。

「じゃあ、カネコさんはもとは戻らなくて、あのまま一生？」

「一生……ならばもうすでに終わっているがな。肉体的な人生という意味であるならば、このまま一生だ。心臓が停止するまで、あのまま『生き続ける』」

生き続ける。

その言葉はあまりにも生々しいものだった。

あのまま、

自分が誰なのか分からず、

そもそも『分かる』という言葉の意味すら分からず、

意識はなく、

訳のわからない言葉をしゃべり続け、

気持ちの悪い表情を浮かべ続けるだけ。

それは、今の自分からみれば、『死』よりも恐ろしい、『生』なのだ……。

「……そんなの……！」

静まり返った場を壊したのは、信じられないことに弥生の絶叫だった。

怒りという感情が、彼女の顔を赤く染め、その吐く息までも荒い。黒髪が逆立つかのような熱を帯びており、激怒していることは明

瞭にして明白。

目を見開き、怒りに打ち震える弥生。

そんな弥生の姿は、今までなかったものであり、長年彼女と一緒に  
だった者が抱く感想といえは、

「……弥生お姉ちゃん？」

困惑。

目の前にいる人物が、今まで長年付き合ってきた、あの弥生だとは思えない。

巖をして、そのような感想を抱かせるほどに、今の弥生の様子は  
普段では考えられないものだった。

「なんで、今更……そんな、今更……最初に！！　なんで、ここに  
来る前、なんで……！！　なんで最初からそれを言わないのよ……！！」  
「……………」

支離滅裂に放たれた言葉の羅列は、それ故に弥生の激情ぐあいを  
知らせてくれる。

常日頃は無表情で塗りたくられている表情が、今では怒り以外の  
感情を見つけることができない。

その目は炯々と、タカダと……そしてヒョウドウに向けられてい  
た。

そんな人を射殺さんとはかりに、睨みつけてくる弥生。

それに相対したのは、またしてもヒョウドウだった。

「そんなことをしたら、人の集まるものも集まらなくなってしまう  
だろう。パイロットは全員が総じておかしくなるんだ。人は多けれ  
ば多いほうがいい」

「　　な……！！」

怒りの臨界点を突破していた弥生は、それ以上の言葉を放つこと  
ができなくなっていた。

内部に滞留し旋回を続ける感情を言い表すには、言葉というツ  
ールでは役不足。

口にだそうという言葉が、すぐさま次の言葉に上書きされて、一

言も口を聞けない状態。それが今の弥生の状況であった。

「数は多ければ多いほうがいい。もとより、『箱庭』とはそういう機体なのだ。」

つまり 誰でもいい。『箱庭』に乗るのは、誰でもいいのだ。ならば、個性など必要なく、そこには数という無個性。それを優先させるのは至極当然のことだろう?」

「ちよ、ヒョウドウさん……」

あまりに率直な物言いに、タカダが言葉を投げかけるも、次が続かない。

ヒョウドウの言葉。

それに、タカダは一つの真実を見出しているのだ。

どんな言葉で言い表そうとも、そこに、ヒョウドウの言った言葉と同じ意味の文脈があることに、同意しないわけにはいかなかった。つまり、誰でもいい。

『箱庭』は、選ばない。

パイロットを選ばない。

誰でも、乗れる。

誰でも、操縦することができる。

誰でも、地球同位生命体と戦える。

パイロットの代わりなど、いくらでもいる。

必要など、ない。

パイロットの1人や2人が再起不能になろうとも、他を探してくればいいだけだった。

「ふう」

ヒョウドウの嘆息。

冷たい印象をそのままに、話はこれで終わりだとしても言いたそうな有様。

そして、帰り支度を行いながら、言葉を放った。

「辞めるのは自由だ。もつとも、その場合だと、このことの口外の禁止が義務付けられ、元の生活に帰っても始終、監視がつくことに

なるだろうがな」

持っていた書類を、トントントンとテーブルで揃え、それを鞆の中にいれる。

そしてそれを肩に背負い、部屋の出口の方向へ。

そのまま、何事もなく出て行くこうとするなか、最後だとばかりに、部屋に残る者達に向かって言葉を続ける。

「それと、もしも残る場合は、ナカハラヤヨイは、ゲンジマイワオの予備パイロットということになる。ナカハラヤヨイ、お前は四番艦の『箱庭』ではなく、式番艦の予備パイロットに鞍替えだ。

勿論、それに伴って、寮の部屋割りも変更という形になる」

「……………え？」

「カネコイタルが想像以上にもたなかったからな。パイロットの『同化現象』はその者の精神状態に大きく左右される。せいぜい、サポートをしてやることだ。

まあ、もつとも……………」

ヒョウドウがドアに手をかけ、そして開けた。

部屋の向こう側、そこには白いタイルで覆われた医療所の領域が見て取れ、この部屋との対比で無機質に見える。

ヒョウドウは、そのまま背中越しに、

「もつとも、『同化現象』が起こったところで、次のを浮き島から呼び出せばいいだけの話ではあるがね」

言い終わったのと、ドアが閉まったのは同時だった。

「……………」

無言という無音が、部屋の中には残る。

2人は、何も語れず、地面を見つめることしかできなかった。

呆然としているのは、一連の話を信じられない故にか、信じた故にか。

複雑そうな表情と、無表情なソレ。

それを顔に描きながら、2人はそこで存在を留めていた。

それを気がねしたように見つめていたタカダは、しかし諦めの表

情とともに部屋から出て行く。

結果、巖と弥生は完全に2人きり。

しかし、でてくる言葉は、継続して無言だけだ。  
静まり返った室内。

無音。

ピンと張り詰めた空気の中、  
そのまましばし、動けなかった。

（続く）

## 第五話

外に広がる暗闇が、静まり返った室内を照らしていた。  
時刻は夕の刻。

段々と日も伸びてきたとはいえ、この時期のこの時間帯では、外は完全に夜の時間だ。

月明かりさえない、黒色の空間。

建物の各部屋からは、それを追い払うかのように光が生み出されていた。

人は暗闇を恐れ、そして電気を光に変える。

蛍光灯に彩られた桜島の風景は、夜景というには華やかさに欠けていたが、しかし都会に浮かぶ星空とでも形容するほどには光り輝いていた。

そこにあつて、今だに電気がつけられていない一つの部屋がある。  
カーテンの内側には、外と同じような暗い匂いしかしない。

パイロットが住む寮。

その中の一室、巖と弥生の部屋は、まるで死人でもたかのように、沈鬱に停滞していた。

部屋の中に、人がいないというわけではない。

げんに、今現在でも、部屋の中に巖と弥生の姿を見ることができ  
る。

しかし、それはそこにいるということ確認させるだけ。

一寸さきはまさしく闇といった室内にあつて、2人はさきほどから身じろぎ一つとらずに沈潜しているのであった。

「……………」

さきほど、タカダとヒョウドウに告げられた事実。

それをどう処理したらいいのか、どのように反応すればいいのか、と、さきほどから2人は思い悩み、そしてそれ故に何もできないでいた。



あの後、行動したことといえば、弥生の荷物を巖の住む寮の一室に運んだことぐらいか。

カネコの荷物もまた整理しなければならなかったと思っていた巖であったのだが、しかしそれは杞憂に終わっていた。

巖と弥生がその部屋に着いた時、すでに表札にカネコの名前はなく、そして室内にはカネコの遺物が何一つ残されていなかったのである。

まるで、一人が今までこの部屋の中で暮らしていたという痕跡がない。

まさしく跡形もなく。

何一つとして痕跡を残さないまま、カネコの姿は巖の前から消え去った。

そのことが、さきほど伝えられた真実とあいまって、ただでさえ不安定になっていた巖の精神を、余計に暗くさせているのである。

本当に僕たちは必要なかないみたいだ。

使えなくなったら、捨てられる。

それはなんというか、使い捨てのコンタクトレンズみたいに。

一度、目の中にいければ、あとはただ捨てられる運命が待っているだけ。

『箱庭』に乗る。

つまりは、おかしくなって、捨てられる。

まるで、自分が一つの『物』にでもなったかのような感触。

個性なんか必要なく、自分である必要すらない。

そんなの……どうすればいいのか、何をすればいいのか、まったく分からなくて……。

思考はグルグルと周り、そしてスタートラインに戻ってくる。

意味のない思考。

益体のない考え。

グルグルと周り続ける環状線に乗ったまま、巖は愚考とでもいべき旋回を続けている。

今まで巖は、自分達の行為に希望のような、やりがいのようなものを感じていた。

いわく、友達のために。

いわく、家族のために。

いわく、人類のために。

何かのために、何かのために。

地球同位生命体から、人類を守るために。

『箱庭』に乗るということはそういうことであって、なんてやりがいのある仕事なんだ、と。

その幾分か思考停止のかかっている思考は、普通人をして思い至ってしまう考え。

それが巖であるならば、そこに行き着くのは、さもありなんといったところだろう。

今までの人生で、自分の頭で考えるということをせず、ただただ弥生と周りの人間の協賛機関でしかなかった巖が、そのような虚飾で彩られた思考に身を委ねたのは、至極自然なことだった。

それが、壊れる。

確かに、『箱庭』に乗るということは、人類のためになるだろう。地球同位生命体と戦うということはそういうことだ。

しかし、

しかし、それは自分がやらなければならないということでは、けっしてない。

誰でも、できる。

別に僕でなくてもいいんだ。

僕がやらなくちゃいけないということではない。

僕がやる必要がない。

誰かがやらなくちゃいけないのだから、それだったら自分がやる、というのもナシだ。

自分がやらなければ、他の別の人間がやるだけだ。

別に、僕がやる必要がない。

人類のために、なんかお題目にすぎない。  
必要ない。

自分はまったく必要なかった。  
意味がなかった。

ここに、いてもいなくてもまったくどうでもよかった。  
意味もないし、必要もない。  
代わりはいくらでもいる。

必要なのは、僕という個性ではなく、数字という機能。  
それは、僕が必要だということではけっしてない。  
自分は、必要ない。

僕は、まったく必要ではない。  
人類を助けるとか、そんなの僕の出る幕ではない。  
必要もないし、意味もない。

それが      自分という存在。  
唐突に思い至った巖の精神が、この重みに耐えられるのはなぜなのだろうか。

グルグルと沈潜していく巖の中にあって、この事実は耐えられないくらいに苦痛であるはずだ。

自らの存在意義を……今まで自分を支えてきた観念を失って、今の巖の心にあるもの、それは一体なんなのであるうか、  
と、その時、部屋の蛍光灯に電気が通った。

ジジジ、という年季のはいったような待機時間のあと、すぐさま部屋の中に光が生まれる。

いきなりのことに、暗闇に慣れた目が光に痛み、目を細める。  
そんなまぶしいような眼差しで電気のスイッチのほうを見てみると、弥生が屹然としてそこに立っていた。

「弥生お姉ちゃん……どうしたの？」

弥生の、覚悟を決めたかのような表情が、少しだけ気になった。  
弥生の姿は、巖と同様に焦燥しきっており、目の下には早々にクマまでできている。

小柄な体躯のうち、肩で息をしているのはさもありなん。  
さらには、長く美しい黒髪が、毛先から若干ほつれ、乱れてさえいる。

しかし、それらよりも先に目にとまるのが、弥生の瞳だ。

疲れきり、その日の力をすべて使い切った様子の弥生にあって、その目だけが炯々爛々と輝いていた。

「……………島ちゃん、帰ろう」

「え？」

「……………帰ろう、島ちゃん……………こんなトコ、いちやダメだよ」

ぐい、とばかりにこちらに身をのりだしてきた弥生。

その迫力に押される形で、巖は一步後ろに下がった。

「帰ろうって……………それってつまり、弥生お姉ちゃんは、『箱庭』のパイロットを辞めて、東京に帰るってこと？」

その言葉に、目の前の女性は、コクン、と頷いた。

それとともに、弥生は巖の間近まで迫る。

憔悴しきった中に、狂気にも似た輝きがその瞳には光っている。

無言の迫力に、巖は蹴落とされていた。

有無を言わせせないような、そんな頑強な雰囲気。

そしてそのまま、弥生は巖の手をつかむと、

「……………帰ろう。今すぐ……………あいつはいつでも辞めていいって言  
った……………だったら、こんなトコ、いつまでも居る必要なんかない」  
常日頃からは考えられないような、明確な意思表示。

その口調には、あいまいなものなど何一つなく、確固たる意思が  
見られた。

「え？　ちょ、ちょっと待ってよ……………」

言いよどむ。

そして次の瞬間、

反射的に、という言葉が似合いそうな自然さをもって、巖は、パ  
シッと勢いよく、弥生の手を払った。

「あ」

それは、本当に反射故の運動だったのだろう。

今、自分が行ったことが自分自身信じられないといった面持ちで、巖は、目の前の弥生の姿を見つめることしかできなかった。

場には、時間が止まったかのような静寂が訪れる。

シーン、と。

風が窓を揺らす音しか聞こえなくなった室内において、2人は互いに相手のことを瞠目として見つめている。

巖の、弥生のことを拒絶する言葉と行為。

それは、今までの巖では考えられないようなことだった。

弥生が右と言えば右。左と言えば左と。

常に盲目的に従ってきた巖が、微弱ながらも弥生を拒絶するような仕草をするのは、普段ではまったく考え付く事もできないことである。

その小さな拒絶が、弥生の心をどれだけ深く抉ったか。

想像することもできない痛みが、弥生の心の中に生まれていた。

「……し、島ちゃん？」

声はかすれ、心に空洞でもできたかのような表情。

弥生は、目の前で起きた事実を信じられないように見つめていた。つまり、巖が自分のことを拒絶したということ。

それは小さな拒絶ではあっても、しかしそんな強弱などこの2人には関係ない。

巖が、弥生の意志を拒絶した。

この2人の関係は、それだけのことがあるだけで、普通人の尺度での裏切りと同程度のものがあるのである。

「ちよつと待ちなつて、弥生お姉ちゃん。そんなに急ぐ必要ないよ…… もうちよつと時間を置いて考えようよ……」

煮え切らない巖の態度には、時間を稼ごうとする見え透いた嘘があった。

ヒョウドウから伝えられたあの事実をもつても、巖はこの桜島に

残りたいという思いのほうが強くなるのだろう。

げんに巖の顔には、東京には戻りたくないという感情とともに、ここに残りたいという思いが、確かに残っていた。

「……………島ちゃん……………」

傷ついたというにはあまりある。

トラウマというものがあるのなら、今まさにこの瞬間が弥生にとつてのトラウマだろう。

絶望、という感情が、弥生の顔を覆いつくす。

それを知らず、巖は、弥生のことを避けるために、横を向いて言い訳を始めていた。

その視界には弥生の姿は映っていない。

自分の思いを口にしても、傷ついた様子の弥生を見たくはないのだ。巖は視線をそらし、ここに残ったほうがいい理由、まだ即断しないほうがいい理由を、歯切れの悪い様子で喋り続けていた。

「だって……………だって、ほら、ヒョウドウさん達の話が本当なのかも分からないしさ。それに、『同化現象』には個人差があるんじゃない？ だったら、もしかしたらオカシクならないまま、っていうことも考えられるしさ……………」

「……………」

弥生は無言のままで、巖を見つめる。

その心中にはありとあらゆる思考が渦巻き、そして滞留していた。巖をここで失うわけにはいかなかった。

今までと同じように、ただ従って欲しかった。

認めてほしかった。

しっかりと、賞賛して欲しかった。承認して欲しかった。今までとなんら変わらない生活を。

今の状態の維持。

それだけが自分の望みだった。

それが……………叶えられない。

ふ、と弥生の体から力が抜けるのが分かる。

覚悟を決めたというよりは、すべてを諦めたかのような境地。

顔にはいつもの無表情が完全に戻り、今の状況との対比で、薄ら寒い印象を抱かせる。

そんな、狂気に身をおいた弥生。

その中で取り出したのは、長方形の重厚な物体だった。

普段、仲のあまりよくない母親からもらった、護身用の携帯物。

黒光りするフォルムは、まさにソレの外観を備え付け、これが本当に護身用のものなのか疑問に思わざるを得ない。

スタンガン、だ。

ソレを弥生は右手で持ち、ゆっくりと近づく。

巖のほうへと。

ゆっくりと。

そして、

「う!？」

押し当てたのは頸動脈付近。

スイッチを入れたのは、一瞬のこと。

それでもあまりあるかのように、巖の体は冗談のように地面に倒れた。

一瞬で力がなくなり、体重を支えきれなくなった脚が膝から崩れ落ちる。

ボタン、という無機質な音。

そして巖の体は、倒れたまま、そのまま動かなくなった。

動く気配が、まったくない。

完全に意識を失っている。

それにも関わらず弥生は、念のためにと、もう一度スタンガンを巖の体に押し当て、そしてスイッチをいれた。

ビクビクつ、と痙攣する巖の体。

その痙攣し続ける巖の体を、弥生は無表情に見つめ続ける。

電流の放電する音が、部屋の中の静寂を震わせる。

ジリリ、ジリリ、と。

何秒かの後。

巖の体から煙が生まれ始めたのを見て、今ようやく、弥生はそのスイッチを絞るのをやめた。

プシュー、という皮膚が焼きただれる音と、人間の体が焼けた時にでる煙が舞い上がる。

それとともに、あたりにはロウソクのような匂いが立ち込め始める。

巖の皮膚がスタンガンの電流に焼かれことを受けて、その体からは、焦げ臭い匂いと、ロウの匂いがあたりには生まれていた。

「……………」

弥生は、巖の体を無表情にみつめる。

すでに絶望の感情は、彼女の表情からは消えていた。

巖の思いなど、知ったことではない。

今までも、形は違えど、このようなことは日常的に行ってきたのだ。

巖を自分の思い通りに、自分に都合のいいように育て上げてきた。精神的に。

言葉と仕草によって。

自分の思い通りに、巖のことを操ってきた。

人形を操るように、操ってきた。

それが今回は、このような形で力を使ったにすぎない。

今までと、やっていることはなんら変わりはない。

島ちゃんを、私の思い通りに。

私のことをどんな時でも誉めてくれる、認めてくれる、賞賛してくれる存在に。

私は、島ちゃんのことを失うわけにはいかない……。

巖の体は、なおも動かない。

意識は完全に消失しており、目をさますのにはかなりの時間を要するだろう。



その前に、この桜島から出れば、それであとはどうとでもなる。  
弥生は、手に持っていたスタンガンをしまった。

そしてそのまま、巖の動かなくなった体を引きずり、リビングの  
ほうへと引っ張っていった。

「なんだか、イワオちゃんの名前って、イワオちゃんらしくないよ  
ね」

「え？　そ、そうかな？」

2人がまだ幼い子供だったころ。

小学生にあがる前の、幼年期の記憶。

公園の砂場で、弥生は巖に対して言葉を向けていた。

「そうだよ……なんだかむずかしい字だし……それに、パパにきい  
たら、イワオって文字のいみは、大きな岩、っていみなんだってよ  
？　やっぱりイワオちゃんには、にあわないよ」

「そ、そう？」

そうだよ、と幼かりし時の弥生は答える。

「それにゲンジマって名字も、なんだかキビシイ感じがするって、  
そういつてたよ？　それでイワオちゃんの名前には「キビシイ」っ  
て漢字がふたつも入ってるからそう感じるんだろうだって」

「それも、ヤヨイおねちゃんのパパがいったの？」

「うん。そうだよ」

弥生の言葉に、はあ、とだけしか相槌のとれない巖だった。

弥生が何を言わんとしているのか、理解できないように首をかし  
げている。

その仕草のまだよく似合う頃で、そこには年相応の無邪気さを見  
て取ることができた。

「だから、イワオちゃんのこと、今日からシマちゃんってよぶね」  
首をかしげて自分のことを見つめてくる男の子に、弥生はそう宣言した。

唐突なことに、やはり巖は何がなんだか理解できていないようで、「なんで？」と短く弥生に対して質問した。

「だって、「キビシイ」って漢字がダメなんだから、それをぬいちゃえばいいんじゃない？ ゲンジマの「ゲン」と、「イワオ」っていう文字をけば、あとは「シマ」っていう字がのこるでしょ？  
だからシマちゃん」

巖島巖の中から「巖しい」という文字を抜かす。  
残るのは、「島」。

だから、私はあなたのことを今日から島ちゃんと呼ぶ、と、その説明を何度しても、巖にはいつまでたってもそのことが理解できないようだった。

尚も首をかしげ、「え？ え？」と疑問詞をあげ続けている。

「もう、いいの！！ シマちゃんは今日からシマちゃんなの！！」  
弥生は、そうきっぱりと言い切った。

その態度に、巖もまた観念したのか、「シマちゃん……シマちゃん」と、口の中でその名前を唱え始めた。

「じゃあ、シマちゃんパパ。おままごとの続きをしましょう」  
「う、うん」

押し切られた巖は、そのまま島ちゃんになった。

これから先、何年も続く愛称が、こんなにも簡単に作られたかと思つと、実に感慨深いものだ。

島ちゃん、と、それから巖はするように呼ばれ続けた。  
そして、それを言い続けた存在。

弥生もまた、巖のそばに、片時も離れることなく居続けた……。

浜風が、弥生の体を襲っていた。

日中とはうって変わって、陸から海へと向かう風である。

空気の流動は陸地の匂いはらみ、しっとりとした潮の匂いと結合していく。

ザザー、と返す波の音と、陸地に立つ木々の葉を揺らす音。

それらが、夜の桜島の中にあつて、人の心を落ち着かせなくさせるような、体の底に響くような音楽を奏でていた。

「……………」

弥生は、歩く。

無言、だ。

その表情にはいつもの無表情が浮かんできているが、しかし今の彼女のソレは少し辛そうな印象を受ける。

それも無理もないだろう。

彼女の肩には、大きな大きなスポーツバックがかけられていた。

そのバックを、弥生は小柄な体ながら大事そうにかついでいる。

中には、おそらく彼女の生活必需品が入っているのだろう。

服に鏡に巖に、その他細々としたもの。

それらをぎゅうぎゅうに詰め込んだバックをもって、弥生はひたすらに前進を繰り返していた。

目的地は、港である。

桜島に唯一ある、漁港を改造した港。

本来、桜島からの移動はヘリなどを使うのが常であるので、この港はただ単に、浮き島と桜島を繋ぐ役目しかもっていない。

いや、平時は、という限定をつける必要があるか。

平時ではなく異時、つまり今の弥生のような場合、この港は桜島から本州への綱渡しを兼ねる。

ヘリという騒音ではなく、船というあまり人目につかない交通手段。

その小さな船によって、ひっそりと東京へと帰ろうというのである。

それが、今の弥生の目的だった。

「……………」

辛そうな表情を無表情で隠しながら、弥生はさらに前進する。重そうなバックを持って、前を見て。

すでに、ヒョウドウには、このことを伝えてある。

つまり、『箱庭』のパイロットを辞めるということ。

桜島から出て行くということ。

こんな所には一秒たりとも居たくないから、すぐさまに東京に帰して欲しいということ。

その弥生の願いは、すべて叶えられることになった。  
20時00分。

それまでに、港に行かなければならない。

小さな漁船じみた船に乗って、帰るのである。

ガサ、ゴソ。

前進を続ける弥生の前に、ようやく港の明かりが見えてきた。

桜島は、やはり広大な面積を誇っている。

ここまで来るにも、徒歩ではかなりの時間を要してしまい、荷物をまとめる時間とあいまって、出港時刻はすぐそこだった。

ガサ、ゴソ。

遅れるわけにはいかない。

自分の存在はイレギュラーなのだ。

おそらく、少し遅れただけでも、当然のように船の出港は中止になっってしまうだろう。

ガサガサガサ、ガガガ。

丘の上。

丁度、港の上に位置する、丘の上に弥生は到着した。

あとは、この丘を下っていけば、着く。

そこまできて弥生は、自身の持つバックに目をやった。

そのバックは、さきほどからガサゴソと揺れに揺れ、暴れまわっている。

中からはくぐもったうめき声と、バックの中を突き破ろうと暴れるまわる男が。

「……………」

弥生はそれでも、無表情、だ。

しょうがないなー、とでも言いたげに、バックをおろす。

そして、地面に下ろしても尚、暴れまわるスポーツバックを見下ろした。

少しばかり、意識を取り戻すのが早かった気がする。

計算違いということになるのだろう。

スタンガンで気絶させてから、どれくらいで人は意識を取り戻すかなど知るわけもない。だから、これも無理からぬことだと、そう思う。

それに、こんなことはまったく問題はない。

意識を取り戻したのなら、もう一度意識を刈り取ればいいだけの話だ。

弥生は、ポケットの中からスタンガンを取り出した。

そして、ゆつくりと、暴れるスポーツバックに近づく。

ファスナーに手をかけ、開ける。

中から見えてきたのは、両手両足を、荷物をまとめる時に使うビニール製のロープで縛られた、巖の姿だった。

「むうつ、むむむ、むうつ」

さらには口に、さるぐつわよろしくガムテープがぐるぐる巻きにしてある。

鼻から下、顔の半分が完全にガムテープで覆い尽くされていた。

これで鼻の穴まで塞げば、1分もせずに窒息死させることができるよつな、今の状態。

巖は、完全に意識を取り戻していた。

そして、今やつとスポーツバックという密室から外の景色を見ることのできた巖は、自分の置かれている状況をしかと理解することになった。

ファスナーが開かれ、その向こうには、無表情の弥生の顔がある。両手両足を縛られたままで、巖は、そのいつもの様子の弥生が持っている物を注視した。

スタンガン、である。

それを見るに、巖はすべてを理解してしまった。

今の自分の拘束を誰が施したのか。

なぜ自分が意識を失っていたのか、を。

「むうつつ、むうん、むんん、むうつ」

「……………ジつとしてね島ちゃん」

ジつとしているわけがない。

巖は、暴れる。

暴れた。

両手両足を完全に縛り上げられているので、微々たる抵抗しかできない。

しかし、微々といってもそれは抵抗であり、スポーツバックの中に拘束されているという状況からなんとか抜け出すことくらいのことではできた。

丘の上。草むらの上に、巖は必死の形相で逃げ出す。

四肢を縛られている巖は、それ故に立つこともままならない。

結果、無様に地面へと寝そべることしかできない。

地面に転がった芋虫。

それを追うのは、その芋虫を虫かごに入れようとする、無邪気な子供だった。

「……………」

無言。

無言のままに弥生は、巖の体に馬乗りになる。

巖の背中の上に乗る、そして脚を巻きつけて逃げられないように

する。

自分の小柄な体では、そうすることでしか巖のことを拘束することはできないと考えたのだろう。

両手両足の拘束もまたそのために。

弥生の手は、万全といえた。

馬乗りの状況。

巖もまたなんとか反抗しようとするのだが、しかし手と足の両方が使えないというのは辛い。

背中に乗る弥生の脚もまた、巖の体をがっしりと掴み拘束し、巖のことを逃がさないように包み込んでいた。

そして、あてる。

スタンガンを、弥生は巖の頸動脈付近にあてた。

その表情には無表情が。

なんの気負いもない。いつもの様子の弥生の姿があった。

首元に押し当てられた冷たい感触。

金属片が首元に押し当てられ、背筋が凍った。

弥生は、本気だ。

この後すぐに。

勢いよく刹那。

自分はまたしても電流によって……、

「むううううううううー!!」

くぐもった声とともに、巖は最後の抵抗にうってでた。

転がる。

転がった。

横へ。

つまり、丘の斜面へと。

巖は渾身の力をふり絞って、丘の斜面を落ちるようにして転がり始めた。

「きゃああ」

短い悲鳴とともに、弥生の体が早々に巖の体から離れることにな

る。

つかまっていらなかった弥生が、丘の斜面に投げ出される。それとともに、巖は窮地を脱することができたのだが、しかし止まることができない。

そのまま、ごろごろごろごろ、と、まるで何かの車輪にでもなったかのように回転しながら落ちていった。

夜の暗闇。

結構な角度のある丘の斜面。

そこを猛スピードで、巖は転げ落ちる。

草むらに突っ込もうが、小さな木々にぶつかりそうになるうが、しかし巖の体は止まらない。

途中、ササの葉などで体の所々が傷つけられるのを感じながら、巖はそのまま転がり続ける。

ごろごろごろごろ。

時々、体が地面に接着しなくなり、その時は文字通りに体が宙に浮いている状態だ。

転がる、というよりは、飛ぶ、という表現のほうが正しいか。

運が悪ければ、首の骨を折って死ぬ、そのようなスピードで、巖は丘の斜面を降りていった。

そして止まった。

急激にというわけではなく、徐々に徐々に。

段々とスピードの落ちていった巖の体は、ボロ雑巾のようになりながらも、なんとか止まった。

「むう、フー、フー、ふふう」

巖は消耗しきった様子を見せながらも、寝そべっていた状態から飛び起きた。

すぐさま、自身の体の状況をチェックし始める。

今の体は、アドレナリンによって痛みという痛みをまったく感じていない。

それをチェックするには、近くの港から漏れる薄明かりの中、自



分の眼でそれを確認するしかなかった。  
手をもって体中をくまなく確認する。

何かが体に刺さっていないか。

どこか骨に異常はないか。

それを手早く確認した巖は、安堵の表情を。

所々体は痛むが、しかし致命傷はなさそうだと。

そしてそこまできて、さきほどまで自分のことを拘束していたロープがすべて外れていることに気付いた。

両手両足。

そこに施されていたビニール製のロープが、すべてほどけてなくなっている。

おそらく、丘の斜面を転がる中、自然にほどけたか擦り切れてしまったのだろう。

そう結論付けた巖は、今だに残っている戒め。

自身の口元にかけてぐるぐる巻きにされてある、ガムテープを取り外した。

「ぷはあー!!」

勢いよく、口で息をする。

体中が酸素を欲していた。

それを補うかのように、鼻と口。

その両方をもって、空気を肺に送り始めた。

「ハア、はああ、かはあ……くそ」

荒々しく息をしながら、巖は胸のうちに巢喰う悪態を言葉にした。

ヒザに手をやり、疲れきった様子を見せながらも、その体には怒り故の迸りが生まれていた。

怒り。

そう、怒りである。

それも、弥生に対しての怒りである。

これは、あまりにもあんまりなのではないか。

僕のことを物のように扱う。

思い通りにいかなければ、それまで可愛がっていたモノを丁重に扱うことはしない。

玩具。

まるで、僕は、都合のいい玩具ではないのか。

胸中にある思いと、悪態をつく言葉。

それとともに巖の表情には、隠す事もできない怒気が生まれていた。

弥生に対しての、明確な敵意、怒り。

それらが童顔とでも言っているいい巖の顔に浮かぶことになり、その様相は一変している。

自動人形から、人間へ。

言いなりの存在から、意思をもった存在へ。

それが巖にとつて、幸せなことなのかどうかは知るよしもないが、しかし巖の心が弥生から離れていっているということだけは事実のようだ。

「はあ、ハア……ちくしょう!!、なんで……なんでこんな……!!」

悪態は尽きない。

弥生への敵意もまた、まったく尽きなかった。

丘の下、少し離れたところに、弥生の目指していた港がある。

大自然の宝庫たる桜島にあつては、そこまでの道のり、緑豊かな木々に遮られてはいるが、さきほどから港から漏れ出す光が、巖の体を照らしていた。

その、港。

そこから、船のエンジンが点火される音が聞こえ始める。

時刻は、20時の少し前。

出向の時刻は、近い。

しかし、そのようなことを知らない巖といえば、

「くそ……クソ!!クソ!!クソ!!」

尚も変わらずに悪態をつくことしかできないようだった。

今まで、弥生の庇護のもとにいた。

なんの疑問も持たずに、周りの人間の……つまりは弥生の言うことだけを聞いていた。

それでいいと思っていた。

人間には分相応というものがあるのだし、自分は前にでる人間ではないのだ、と。

しかし、それは単なるいい訳に過ぎなかったのではないか。

確かに自分の意思も何もかも、言わず存ぜず周りの人間の協賛機関になっていれば、それだけで日々を暮らしていける。

苦しむことはなく、周りに追従し反抗しない限りは、そこに待っているのは身分相応な楽しい毎日だ。

今までそのようにして、生きてきたし、**楽もしてきた。**

「ただ、でも……これでは自分が生きていく必要がないではないか。」

その考えに行き着いた時、巖は、ハツ、としたように面をあげた。  
今の思考……それは、『箱庭』に乗ることと同じことではない  
のか、と。

つまり自分は、この桜島に来る前から、すでに必要もない、意味のない、なんら今この場で死んでもとるにとらない存在だったのではないのか、と。

「そんな……!」

語尾は小さくなり、心細そうな声になる。

思い知ってしまった。

別に、『箱庭』など関係もなかった。

必要なかった。

自分、という存在がそもそも、最初から、何にもまさらず、必要なかったのだ。

「……僕の……せいじゃない……僕のせいじゃない。僕が悪いわけじゃない」

唐突に思い至った巖は、生贄を探し始める。  
では誰が、と。

自身の自尊心、精神の安定のためだけに思考する巖は、自分が傷つくことのない理由を探す。

ただ、自分のためだけに。

責任を転嫁する。

今までの人生の営みに、自分以外の瑕疵を見つけようと、無様に喘ぐ。

その矛先がどこに向かうか……犯人探しをする前から、分かりきっていたことだった。

「弥生……お姉ちゃんの……せいだ。僕がこんなになったのは、弥生お姉ちゃんの………」

呟いた瞬間、巖はすべてが嫌になった。

思い浮かべたすべての思考に、嘆息するとともに否定の考が入る。そして、似合わないように、皮肉めいた苦笑をその顔に浮かべた。そんなわけない、と。

誰かのせいとか、そんなことじゃない。

そんな、簡単なことではない。

そんな、救いのあるような問題なのではない。

というか、これは自分だけの問題ではないのだろう。

みんな、だ。

みんな、みんな。

徹頭徹尾。

世界中のすべての人が。

全員総じて、必要もなければ意味もない。

苦笑は高笑いとなって、巖の口から乾いた笑い声が漏れ出す。

何もかもが、どうでもよくなったような……無力感に打ちひしがられる。

その様子は、どこかヒョウドウのような雰囲気さえ醸し出している……、

ガサ。

と、その時、音がした。  
後ろを振り向く。

風のたなびく荒野の中。

港から漏れ出す薄明かりの中。

波の返す音の響く草むらの中で、

スタンガンを持った、弥生がそこにいた。

「……………島ちゃん」

その顔には、焦ったような焦燥感がある。

それも無理もないことだろう。

あと何分かで、港から船がでる。

それまでに、港まで巖を連れて行かなければならない。

「……………島ちゃん……………一緒に帰ろう？」

願うような思いが、そこにはあった。

巖に向けて、手を差し伸べる。

右手で。

左手は、スタンガンを持ったままで。

弥生はそのまま、巖へと近づいていった。

「……………島ちゃん」

一步一步。

弥生は、巖に近づいていく。

船の出港は、近い。

さきほどから、船のエンジンの音が、夜の海岸線にしきりに響いていた。

弥生は慌てたように、一步一步。

そこにある焦りは、一体何を生むのだろうか。

「……………帰ろう？」

また元どおり。

前みたい、いつまでも一緒にいよう。

その言動の裏に隠された思考が、巖には手にとるように分かった。

それを思うと、胸の奥から何かが飛び出ていきそうになる。

自分の体を突き抜けて、何かが溢れ出していきそうな、そんな感覚が巖には感じられた。

弥生が、巖の手をつかむ。

有無を言わせないように、その手を力強くつかみ、そして港のほうへと引っ張っていかうとしている。

しかし、巖の体は、その場所に吸い付いたかのように動かなかった。

「……………島ちゃん」

「いい加減に……………」

俯いた表情は影になって見えない。

見えないが、しかしその怒気をはらんだ声を聞くと、容易にしてその様子を予想することができる。

巖は、これまでの人生の中で始めて、本音をもって弥生と対峙した。

「いい加減にしてくれ!!」

叫ぶと同時に、弥生の手を今度こそ自分の意思ではらった。

反射というわけではない。明確な意思をもって、巖は今、弥生のことを拒絶した。

シーン、とした空気の冷気が、草むらの上に流れた。

風の木々の葉を揺らす音が、象徴的に響く。

エンジンの音が、どこまでもどこまでも鳴り響いていた。

「……………し、島ちゃん？」

「俺は、あんたの玩具じゃない!! ちゃんと俺にも意思があるんだ……………なんで……………なんであんたの思い通りにならないといけないんだよ!？」

「……………し、……………」

弥生の言葉は続かない。

島ちゃん、と。

いつものように呼びかけるには、目の前にいる人間は自分の知っ

ている巖とは似ても似つかなかった。

スタンガンを持つている手に、力がなくなる。  
落下、した。

スタンガンが、草むらの上へと、落下、した。

「ボクは残る。桜島に残るよ……弥生お姉ちゃんには着いていかない。僕は、残る」

あいまいな表現をまったく使わず、弥生に対して面と向かって言い放った。

その態度は、毅然、の一言。

童顔な顔は相変わらずだが、そこには今までに見られることもなかった精悍な顔つきがあった。

「怖いけど、残る。ボクは必要ないだろうけど、残る。ボクにはなんの意味もないだろうけど……残る。弥生お姉ちゃんはどうするか……自分で決めてよ」

「……………あ」

何かを言おうとした弥生を待たずに、巖はさきほど転がり落ちた丘を登っていく。

小柄な体格は変わらない。

脚の短さも変わらない。

しかし、その歩き方は虚飾でも虚栄でも強がりでも……たとえその中のどの言葉で彩られようが、堂々とした姿がそこにはあった。

その後姿を見て、ヒザをついたのは弥生だった。

目を見開き、そこから涙だけが流れている。

絶望というよりは虚無。

何も無い、しかしそれでいて喪失感だけは残っているかのような表情が、凍ったようにソコにあるだけ。

ポタポタと、瞬きもせずに見開かれている目から、涙が次々と草むらに染み込んでいく。

弥生の長い黒髪が、振り乱れたように風に舞っていた。

時刻は、20時00分。

辺りは、薄明かりに包まれた暗闇。

さきほどから聞こえてくる、船のエンジン音。

それが今、唐突に、止まった。

（続く）



## 最終話

社会への必要性から微粒子たる必要性へ。

平成38年。8月7日。神奈川県、三浦市。

三浦海岸海水浴場。

神奈川県の最南端。

三浦市にある、1kmもの砂浜がのびる海水浴場である。

季節は夏であり、さきほどから潮の匂いとともに、もわもわとした熱気がそこらじゅうから噴き出していた。

広大な、砂浜だ。

海はお世辞にも綺麗だとはいえないが、しかし夏休みともなると、ここは多くの海水客で賑わう。

その客をめあてに、長く広く伸びる砂浜の根元では、海の家が無数に乱立していた。

『乱立していた』……そう、それは文字通りの、過去形だ。

今では、それらの建築物はすでに廃墟。

完全なきまでに破壊されるに至っている。

そして、破壊されているのはそれだけではない。

周りには、有機物の塊が落ちている。

潮の匂いに混じって、鉄分を多く含んだ液体の匂いが、砂浜には漂っていた。

それとともに、腐ったような硫黄の匂い。

食い散らかされた人間の体と、その内部に溜まっていた臓物が、見事な色調をもって砂浜に転がっていた。

地獄絵図、とはまさにこのことだろう。

砂浜にはもはや生きている人間などいなく、そのすべてに顔がなかった。

この場所には、こんなにも食料があるのだ。

人間の中で、一番おいしいところを。

どうやら地球同位生命体の好物は人間の頭らしく、そこだけが丹念に食べられてた。

鮭を食べる熊は、その頭の付け根の部分だけを食するという。

そこに一番栄養がたまっており、そして美味しいらしいのだ。

人間もまた、同じだった。

ここにおける人間の役割は、地球同位生命体を満足させるための食料に他ならなかった。

午前11時。

海水客で一杯になった三浦海岸海水浴場に、地球同位生命体は現れた。

『人型』と『鳥型』の混合編成。

最初に上空から『鳥型』が現れ、そしてその後すぐに海から『人型』が。

そこからは、虐殺ですらなかった。

ただの食事の時間だった。

次々に食べられていく人間の悲鳴と絶叫。

ムシャムシャとおいしそうに、それら有機物の塊を食べる地球同位生命体。

その光景は、30分後には完全に沈黙することになった。

終わったのだ。

食事の時間が終わった。

残ったのは、地球同位生命体と、食事の跡だけだった。

桜島から13小隊、14小隊、21小隊、23小隊の計20体の『箱庭』が到着したのは、このようにしてすべてが終わった後だった。

しかし、被害が三浦海岸海水場に来ていた1000人あまりの人間で済んだということは、僥倖だということが出来るのだろうか。被害がそれ以上広がらないように、『箱庭』は奮戦を始める。

『人型』と『鳥型』

砂浜を多い尽くす、それら奇形の群体に対して、『箱庭』は方陣を組んで、相対していた。

四角形の方陣。

一辺には5体の『箱庭』が鎮座し、それが16体続いている。

16体の『箱庭』で、一つの四角形を。

各方向に対する、死角なしの隊列を組んで、さきほどからライフルの連射に余念がなかった。

ガチャン、ガチャン、と、弾を充填する音と火薬の爆発していく轟音が響く。

その方陣を包囲し、盲目的に突進してくる地球同位生命体は、それによって次々と命を落としていった。

『……そのままライフフル斉射。可能な限りだ』

ヒョウドウの命令が、『箱庭』と同化しているパイロット達に響く。

そんなことは言われるまでもない、と、計20体の『箱庭』はさらにトリガーを絞る速度を速めた。

『……………』

ガチャン、と弾を装填しながら、13小隊式番艦のパイロットである巖は、無言で嘆息した。

砂浜という陸地から突進してくる『人型』。

それらは確かに、数を減退させていた。

当初あれほどまでに周囲を覆っていた地球同位生命体の姿はまばらになり、全滅までは時間の問題と言える。

懸念材料は、上空に漂う『鳥型』の地球同位生命体だ。

(……………4体じゃ無理だ……………)

巖の思考は、方陣の隊列にあった。

計16体の『箱庭』が四角形を作り、陸地を滑走してくる『人型』を担当。

そして残りの4体が、その四角形の内部に入り、上空から急降下してくる『鳥型』を担当していた。

その『鳥型』の攻撃が、段々と組織だったものに変わってきており、4体の『箱庭』ではもうもちそうにもない。

そのように、その4体の『箱庭』の内の一体である、巖は考えているのである。

周囲で味方の銃撃がカーテンをつくる中、巖は一回り大きいライフルを、上空へと狙いをつけていた。

即席に設置されたスコープを覗きこみ、狙いを正確に。視点到に標的が入った瞬間、勢いよくトリガーを絞った。

瞬間、はじける。

空から方陣へと急降下しようとしていた地球同位生命体は、その身をバラバラにして、雨のように空から降ってくる。

それをモロに浴びる形になった巖は、しかしそんなことを気に留める様子もなく、すぐさま弾を充填する動作を繰り返す。

終えて、銃口を上空へ。

さきほどからこの動きを繰り返している巖は、スコープから覗く光景を見て、絶句した。

あゝあ。

とばかりに、その思考には諦めが入る。

無気力に。

心など必要なく。

必要なのは軍隊における錬度。

それらを余すことなく身につけ、すっかりと心を鈍化させつつある巖は、客観的側面から今の光景を見つめていた。

空から、死神がふってくる。

その数は、6体。

6体の『鳥型』が、等間隔で方陣めがけて急降下してきた。

『……………』

焼け石に水であることは分かっている、少しでも数を減らしておいたほうがいいだろう。

いや、まあ所詮は無駄なことなんだろうけれど。

そのような思考とともに、巖は上空へと向けたライフルを行使した。

破壊できたのは当然のように1体だけだ。

『鳥型』を担当する他の『箱庭』もまた応戦するが、しかしそれでも無力化できたのは2体。

残りの3体の『鳥型』。

鍵爪を隠そうともしないそれら鳥の化け物は、そのまま方陣へと突っ込んだ。

「  
崩れる。」

崩れる。

方陣という死角なしの隊列の中にあつて、唯一の盲点は上空。

四方六方に対する鉄のカーテンは、平面に対してのみ有効。

立体からの攻撃。

つまりは、上空からの猛追に対しては、いくら方陣といってもその固持は不可能なものだと言えた。

四角形の一辺に3体の『鳥型』が乱入し、そして崩された。

丁度、四角形が『コ』の字の状態になるほどに、その急降下は激しく、そして効果的だ。

4つの一辺が、互いに互いを守るようにして死角をなくしていた。その内の一辺が崩される。

ここから起こることなど、火を見るよりも明らかだ。

『全員、着剣』

完全な泥沼に陥る前に、ヒョウドウは白兵戦へと移行させようと命令を下した。

死角がなくなってしまった以上、ライフルによる射撃では周りを囲む地球同位生命体にあつという間に殲滅されてしまう。

ならば、と。

それならば、銃刀による戦闘のほうか、幾分かはマシなのではないか、と。

巖も、自分の背中に備え付けられている、刀身を手にとり、ライフルにつける。

その行動は実に淡々としたもの。

数は減ったとはいえ、周りを多数の『人型』が包囲する中で、その落ち着きようはある意味、不自然だった。

ライフルに刀身を備え付け終わった巖は、前を見た。

そして、

目の前に迫った地球同位生命体の姿を見つけた。

ふっと、ばかりに嘆息が漏れる。

勿論、今の巖の体は鉄の塊であり『箱庭』であり、人間の吐息とともに出される嘆息とは性質を異にしていることは確かだったが、しかし心理状態としては、それはまさに嘆息だった。

一気にこちらを殲滅しようとする無数の『人型』。

それが、周囲あますことなく、そこらじゅうからこちらに突進をしかけてきている。

さらには、さきほど急降下してきた『鳥型』

3体の内に2体までは地上で撃退することに成功していたが、残りの1体。

それが、今、鍵爪に『箱庭』をつかんだままで、上空高くまで舞い上がった。

『鳥型』の鍵爪は、『箱庭』の頭の部分を掴み、その部分はベコリとへこんでしまっている。

けっして放すつもりはない。

そのまま、『箱庭』を拘束したまま、『鳥型』は空高くまであつという間に消えていった。

それを間近で見ていた巖は、しかし何も思わなかった。

淡々として目付きで、おゝ、飛んでった、みたいなノリで空を一

瞬だけ見つめる。

胸中には、鈍化させることに成功した弾力のない心が。  
巖の姿が生身の人間であつたならば、死んだ魚のような目を浮かべているだろう。

そのような情景が、容易に予想できた。

巖は、このようにして仲間がやられたことに対しても、明らかに無関心だ。

そしてそのままの状態で、突撃してくる『人型』に相対した。

味方もまたそれらに対して、対応を行うに至っているが、まだ刀身をライフルに備え付けることができないでいる者もいる。

混戦は必死だろう。

そのような思考を思い浮かべた直後、

『人型』の先方が、『箱庭』の隊列へと突っ込んでいった。

激突。

すぐさま、かるうじて組まれていた隊列は完全に崩れ、近接戦闘が開始される。

『箱庭』よりも、『人型』の地球同位生命体のほうが若干、数が多いという状況。

そんな中で、血で血を洗うような、すさまじい白兵戦がそこら中で展開されることになる。

巖もまた、その中に居た。

『……………』

無言、だ。

無言のまま、銃刀を『人型』目掛けて、突く。

突く。

突く。

突く。

突いては、引き、そしてまた突く。

地響きの中、地球同位生命体の断末魔が砂浜に響き渡る。

風の吹く中、波の音がそれら破壊の音で掻き消されている。

『箱庭』が動くことに、金属のすられる音と、空気の流動が生まれている。

壮大な戦場の風景。

そこに有る巖の姿は、もはや形状ではなく動きまでも機械だった。弥生との一件があつてから、すでに3ヶ月近くが経過している。その間、巖はひたすらに戦闘を繰り返し、無力感に押し切られ、そしてすっかりと変わり果ててしまっていた。

その様子は、桜島にいるパイロットの姿に類似する。

そして、ヒョウドウの様子とも瓜二つだった。

無気力に無関心に。

ただ、与えられた仕事を成すだけ。

いつかは、自分はオカシクなるといことが分かっているのだ。未来に希望など持てず、すべてがどうでもいい。

何かを為そうと思つても、それらは自分のやる必要のないこと。仕事、という意味では確かに、『箱庭』に乗ることは必要なことなのだろう。

人類のために、日本の平和のために、意味のあることなのだろう。しかし、それは別に、自分がやらなくても実現されることだった。やりがい、というものが感じられない。

『箱庭』に乗ることなら、誰でもできる。

道具でしかない。

役割を達成するために用意された、道具でしか自分はなかった。別段、自分がやらなくても達成されてしまう仕事。

社会に対する必要性がまったく感じられない。

ボクの行為は、必要ない。

意味もない。

それなのにも関わらず、ボクは『箱庭』乗らなくてはいけない。

そして、『箱庭』に乗るといことは、いつか死ぬ……自分が自分でなくなってしまう。

オカシクなってしまう。



そんなになつてまで、なんでボクはこんなことを続けるのだろう、と。

無力感に押し潰されそうになつた巖がとつた処世術は、それ故に心の弾力をなくすことだつた。

何を見ても何も感じない。

日々を生きる中で、極力、何も感じないように過ごしてきた。

それは、日々を過ごすための思考停止。

何も考えなければ、少なくとも自分が必要ではない、意味もないということを考えなくてもすむ。

感動はゴミ箱に捨てた。

悲しみは不燃ごみへ。

新鮮さは、こんなものくだらないという思考で既成概念に押し込めた。

停滞は、喜ばしいものだと思ふに推奨した。

好きだという感情は、自らの心を鈍化させることによって何も感じなくなった。

嫌いだという感情は、その感情が胸の中で言葉になる前に、他の言葉で上書きした。

苦しいという思いは、これが普通なのだと思ふに相対化した。

嬉しいという思いは、世界の問題というより大きなものによつて矮小化した。

何も、感じないように。

何も、見ないように。

関わりを持たないように。

苦しまないように、生きていくために。

意識的な無意識。

本心ではなく、そうしないと精神が持ちそうにもなかったから。

虚飾に満ちた、ハリボテで構成されている中身。

巖の心の中には、今、もはや何もなかった。

『……………』

突く。

引く。

突く。

引く。

周りには、隊列を保った味方などいない。

皆が皆、自分の身は自分で守るという思考で、孤軍をもって奮戦している。

泥仕合。

数は地球同位生命体が。

しかし、優勢なのは『箱庭』。

さきほどからやられるのは、地球同位生命体ばかりで、『箱庭』側の犠牲はまだでていない。

巖の耳に聞こえるのは、奇怪な形状をした化け物達の、キーンと耳に響く断末魔だ。

銃刀戦闘をもって相対する、『箱庭』の性能が如実に現れる戦場。ゆっくりとだが確実に、地球同位生命体の数は減退していつてい

る。そこに、油断があったのかどうか。

『人型』だけであつたならば、問題はなかっただろう。

勝つのは、『箱庭』だっただろう。

しかし、現在の戦場は状況が違う。

もう一種類、地球同位生命体が。

『鳥型』の地球同位生命体がいるのである。

響き渡ったのは、鳥の鳴き声に似た咆哮だった。

軍勢の放つような、決死に満ちた叫び声。

声は言葉としての意味を持っておらず、その意味では今の地球同位生命と『箱庭』の違いはなかった。

空からの耳につく叫び声を聞いた巖は、空を見る。

見て思わず、ハハハと笑ってしまった。

壮観な風景だなー、と、その現実を受け入れたくない心境が真剣

には受け取ろうとしない。

巖の頭上。

頭上から、一直線に『鳥型』が落ちてくる。

その数は、さきほどの比ではない。

一ではなく、全。

まるで『箱庭』の隊列をまねるようにして、空高く、そこには一列の隊列が見られる。

空一面を多い尽くす、『鳥型』の群れ、群れ、群れ。

総攻撃。

それが今、地上へと降り注いだ。

『

巖の周りに、砂浜の砂が舞い上がる。

それは衝撃の大きさ故に高く舞い、一種の煙幕のようなものを形成していた。

『人型』を巻き込んでの、自身の身を省みない、決死の攻撃。

『鳥型』の体が、即席の爆弾になる。

位置エネルギーと運動エネルギーの相乗効果

それが今、『箱庭』の壊滅を告げるのろしとなった。

周囲に漂う、破壊の跡。

何体もの『箱庭』が、落ちてきた『鳥型』とともにバラバラになっている。

一挙にして形勢逆転。

戦場に、新たな局面が訪れることになった。

そして巖も、直撃こそ避けられたものの、その余波とでも言うべきものを受けていた。

巖の周囲。

周りの味方が、すべて壊滅したのである。

『え？』

自分の周り、そこには瓦礫と化した『箱庭』の姿しかない。

その変わりともいえるのか、地球同位生命体の姿だけは無数にあ

る。

周囲には、無数の『人型』。

味方の『箱庭』の姿は、皆無。

孤立、した。

巖の周りには、地球同位生命体しかなかった。

ドクン。

と、自分の心臓が脈打つのが分かった。

背筋があるならば、すでに凍っているはず。

眼球があるのならば、それは呆けたように見開かれているはずだ。  
孤立。

それが何を意味するのか、現実逃避に明け暮れる巖といえども、  
分からないはずがない。

『え？ ちょ、ちよつと待……』

待つてくれるはずがなかった。

周りの地球同位生命体が動きだそうとしていた。

それとともに、巖の思考も停止状態からなんとか復旧する。

焦ったように、惨めさをそのままに、巖は周りの状況を確認しようと、自身の鉄で構成された顔を動かす。

周りは、完全に敵だらけだ。

その事実を事実として受け止め、では他に何か希望となる情報はないか、と、見渡す。

そして、見つけた。

自分を包囲することになっている『人型』の地球同位生命体。

その向こうに、突然の奇襲から無事だった、7体あまりの『箱庭』  
が固まっている。

それだけを認識するとすぐさま、巖は『人型』の包囲を抜け出そうと行動を開始した。

手には刀身をつけたライフルを持ち、それをお守りのように硬くに握っていた。

脚は、迷うことなく味方のいる方向へ。

孤立した現状。

それが、今までにない恐怖感を、巖に感じさせていた。それまで巖は、死、というものにそんなに恐怖心を抱いていなかった。

いや、むしろその逆。

つまり、死ぬことはないだろう、と。

死ぬことはない。というか、死というのは逆にすばらしいものなのではないか、と。

徐々にオカシくなっていくことを思えば、ひと思いに華々しく散ったほうが格好がいいのではないか。

死さえ許されない自分達は、死に行く者よりももっと不幸で、不運なのではないか。

そのようにさえ、巖は考えていたのである。

しかし、

『ハア……うう、ああ……あああああ！！』

死という現実が目の前に迫るにいたって、巖は初めてその恐怖を感じていた。

恐かった。

体の底から、湧き出てくるかのような恐怖心だった。

ソワソワと落ち着かない。

自分が今、何をやっているのかが分からない。

目は見開かれ、眼球だけがせわしくなく動き回る。

目の前に迫った、地球同位生命体。

こちらに手を振り上げるその姿を見て、何も考えずに突っ込んだ。

ただれたような皮膚に、刀身を突き刺す。

すぐさまそれを引いて、すぐに次の標的へ。

止まるのが、恐ろしかった。

止まってしまったら、その恐怖心よりもさらに大きな感情に飲み込まれる。

死、という圧倒的な暗闇。

それを考えるのが、どんなことにも変えて、恐ろしかったのだ。

『ああ……フウ、ふ……ああ……』

漏れる言葉は、『箱庭』からではない。

それは内部の通信にのみ有効な音声。

仲間への通信を目的に作られた機能なのであるから、外へと漏れる必要はない。

誰にも認識されることもない焦燥感を音声で表現しながら、巖は狂気に身が焦がされるのをなんとか避けていた。

今まで精神を安定に導いていた無気力無感動という処世術は、ここにモロくも崩れさる。

そこに残っているのは、ただ単に巖島巖という人間だけだった。惨めたらしくあがくさま。

銃刀を無闇に振り回し、あがき、醜く、生への渴望。

恐怖を押しつけようと、身が狂気に支配されようとするのを、必死の思いで食い止める。

戦場で狂気に身を任せれば、周りが見えなくなり、すぐに死ぬ。

視界が狭くならないように、地球同位生命体の次の動きを予測するため、平常心をなんとか保とうと、巖は必死だった。

突き進む。

段々と、味方の『箱庭』の姿が見えてきた。

あと、少しだ。

銃刀を振り回す。

突き、そして引く。

それを繰り返し、脚はひたすらに前進を繰り返している。

突く。

引く。

繰り返し、繰り返し。

それを盲目的に行いながら、あと少しで味方のいる場所に合流できるところまで。

やっと来れたというまさにその時。

巖はすぐ横で戦っている、『箱庭』の姿をみつけた。

ボロボロになった、1体の『箱庭』だ。

それが、片足がひしゃげた状態で、周囲、地球同位生命体に囲まれていた。

手には刀身の折れたライフルが持たれているが、それがなんの効果ももたらさないというのは明らかだった。

巖は、その『箱庭』から視線を逸らす。

逸らし、そして目の前の敵に刀身を叩き込む。

進む。

前へ。

進む。

自分を遮る敵が、いなくなった。

前には味方の計7体の『箱庭』がいる。

各自が各自、地球同位生命体と奮戦を続けながら、徐々に隊列を組み直し始めている。

巖は、何も考えないようにしながら、そこに自分も加わろうと…

…、  
『くー！』

巖の脳裏に、それまでの自分の行為が走馬灯のように蘇る。

何も感じることもなく、生きれるはずがなかった。

それは、一時的なまやかしかでしかなかった。

恐かった。

恐かったのだ。

今までの思考は、それを紛らわすためのものでしかなかった。

無気力に。

無感動に。

何も感じることもなく生きることができたら、少しは楽になれるのに、と。

それだけから生み出された処世術。

少なくとも、今のボクには、その思考を身体の細胞の一つ一つにまで浸透させることはできない。

恐かった。

恐ろしかった。

涙腺があるならば、絶対に今、泣いていることだろう。

排斥機能があるのならば、身体の中の廃棄物が外に垂れ流しになっ  
っているはずだ。

恐い。

その感情に気付きながら、これ以上、何も感じることなく生きて  
いこうなどと、今の自分には考えることができなかった。

ガチガチと、歯の根が鳴る。

さきほどから、何か自分は叫んでいるようだ。

恐い。

目の前には、7体の『箱庭』ではなく、1体の『箱庭』

片足を失い、今まさに壊されようとしている、1体の『箱庭』  
ヒョウドウの通信が耳に入ってきた。

戻れ、という言葉だけがかるうじて聞こえた。

その、意味がわからなかった。

だから、そのまま直進を続けた。

恐かった。

ライフルを振り上げた。

銃刀に、突くこと以外に攻撃力がないことを忘れていた。

恐かった。

でも、もう手遅れだった。

行動を止めることが手遅れだった。

恐い。

恐い。

恐い。

恐い。

死んでくれ、頼むから。



『あああああああああああああ！！』

意味のない絶叫をあげながら、突進する。

感情が、胸の中に突き刺さる。

それが、自分の身体の隅から隅まで支配するイメージ。

そのまま、手負いの『箱庭』を包囲する地球同位生命体に、銃身をぶつけた。

自分の部屋に戻ってきた巖は、焦燥に駆られた様子をそのままに、ベットへと倒れこんだ。

夏特有のもわつとした室内。

窓から西日が差し込むのを見ると、体温が余計に熱くなるのを感じた。

埃っぽいような感じが、鼻につく。

部屋の中では、太陽の光に照らされ、小さな綿ぼこりが宙を舞っていた。

巖の体はそんな中であって、まったく動かない。

ベットで死んだように身動きをとらないまま、巖はさきほどまでのことを思い出していた。

さきほどまで自分が居た、砂浜の戦場。

過去に類を見ないような死傷者数をだした、あの戦いだ。

そこで起こったこと、特に自分が行った行動について、巖は自問自答を繰り返した。

つまり、なぜ手負いの『箱庭』を助けようと、ボクは突っ込んでいったのだろうか、と。

自分が自分で理解できないような様子で、巖は思考の渦に巻き込まれていく。

気付いた時には、動いていた。

何かなんだか分からないまま、それでいて『死』という一つの恐怖をしっかりと感じながら、銃身を敵に叩き込む。

我にかえった時、周りには多分、ボクが殺したのであろう地球同位生命体が転がっていた。

よくもまあ、あんなにも自分を恐怖で見失いながら、死ななかったものだ、そう思う。

狂気に身を置きながら、それでも生き抜けたのは、ただ単に運がよかっただけなのだろう。

一歩間違えれば、死んでいた。  
死。

その一言を思い浮かべるに至って、自分の身体がガチガチと震え始めるのを感じる。

こうしてあの場所から帰ってきたというのに、ボクの体は思い出したように震え続ける。

恐い。

今も尚、変わらずに恐かった。

恐ろしかった。

自分が自分でなくなるというのも。

それも勿論、ボクの心の中で時限爆弾のように潜んでいる。

それだけでもボクの精神には余裕はないのに、それに加えて今日の出来事。

死ぬ、ということに対する恐怖。

それに気付くと、もうボクという存在だけでは、それらに耐えることができそうになかった。

だから誰かに……。

他の誰かに、この苦しみを分かち合って欲しいと……。

巖がベツトで震え続ける中、今、ドアの軋む音とともに弥生が入ってきた。

おどおどと、その表情にはどうしたものかと思案する表情が浮か

んでいる。

あの一件以来、弥生と巖の関係は明らかに変化した。部屋に一緒にいる時にも、必要最小限のこと以外を口にしない。べつたりと寄り添った関係から、別個独立に存在する人間へ。それを望んだのは巖だけで、弥生はその関係に居心地の悪さを感じていたが、しかしそれを是正するのに大胆な行動をとれないでいた。

あれほどまでに強引に打った手が、完全に裏目にでたのだ。

それ以上、弥生には巖に対して何か行動を起こそうという勇気がわいてこなかったのだった。

「……………島ちゃん？」

寝室まで弥生が入ってくる。

そして、ベットの上で仰向けのまま寝そべり、震えている巖を見つけた。

「……………」

かつての弥生ならば、そんな巖の姿を見つければすぐにでもそばに駆け寄り、そして抱きしめていた事だろう。

しかし、それはもう過去のことだ。

今では弥生は、その巖が寝そべっているベットの端に、小さく腰掛けるのが精一杯だった。

震え続ける巖の姿を見て、音をださないように吐息を漏らす。

そこには、母性とも言うべき感情が存在していた。

震え、震え、一人で震え。

夜な夜な枕を涙で濡らしているのを、弥生は知っている。

苦しいこと、一人だけでは耐えられないことを、この人は歯を食いしばって我慢している。

力になつてあげたい。

苦しみから少しでも開放してあげたい。

だけどそれらの思いは、今の島ちゃんには逆効果なのであろう、と。

自分一人の力で。

なんとか現状を変えていきたい、生きていきたい。

それが今の島ちゃんの願いなのだろう。

そう理解している弥生は、自分自身の感情を我慢して、巖の願いを不作為という形で叶えてやっていた。

苦しいのは、巖だけではない。

自分もまた苦しく、恐く、不安でしょうがない。

すぐる相手が欲しく、それは巖以外には考えられない事だ。

それらを、弥生は我慢する。

自分の願いよりもさきに、巖の願望を尊重する。

弥生の中には、巖という尺度しかないのだ。

世界は、巖を中心に回っている。

おそらくそれが、巖と弥生の一番の違いだろう。

巖は今、大きな役割に捕らわれ、そしてそれ故に悩み苦しんでいた。

必要性。

自分という存在の意味。

それらの観念に、巖は今まで一人で苦しんできた。

一人で。

自分の意思で孤独を装って。

巖は弥生との一件以来、そうしてひたすらに日々を過ごしてきた。しかし、それにも限界がある。

人一人が背負いきれるものではない。

というか、彼は今、背負うべきではないものを、必死で背負い続けていた。

限界なら、とうの昔に超えていたのだ。

「……………怖い」

仰向けの状態で巖が口にした言葉は、シーンと静まる室内で小さく反響した。

それを聞いた弥生は、ビクッとしたように身体を震わせる。

急に響いた巖の言葉。

その声が、なんだかひどく冷たいような気がしたのだ。

そして彼女の怯えは、巖の次の行動を見れば、あまりにも当然のことだといえた。

「……………え？ 島ちゃ……………」

「恐いんだよおおおッッ」

起き上がる。

弥生の肩を掴んだ。

そしてそのまま、ベットの方向へと弥生を押し倒した。

「……………え？」

弥生は下に。

巖は上に。

ベットの上に、女性を押し倒す。

その上にあるのは、一匹の牡だった。

「恐いんだよ。死んでしまうことが……………ボクがいなくなってしまうことが！？ 恐いんだよおお」

巖の目には、涙が浮かんでいた。

繕ったような表情はナリをひそめ、そこには虚飾のはがれた本来の姿があった。

顔は恐怖でゆがみ、それは明確に自分を受け入れてくれる存在を求めていた。

「……………島ちゃん？」

「恐い恐い恐い恐いんだ。何か役割が欲しい。自分だけの仕事に欲しい。こんな部品みたいに使い捨てられるようなものじゃなくて、自分だけの仕事に欲しいんだ……………」

意義が……………意味を与えて欲しい。ボクのやることに、納得のいくような意味が与えられれば……………ボクはもう、それ以外には何もいらないのに……………」

「……………」

狂ったように喚き散らす男の姿を見て、弥生は二の次を告げない

様子だった。

両肩を押さえつけられ、手が動かない。

というか、巖の体が完全に弥生の体に覆いかぶさっているから、身体がそもそも動かなかった。

弥生は、呆然、の一言。

今の巖の様子は、あの一件でも見られなかったほどに取り乱している。

それを見て、弥生は、「あー、こんなにもこの人は無理をしてきたんだな」と他人事のように思った。

「与えてくれよ。なんでもいいから。ボクが必要だっていう、それだけの意味を……下さい。お願いします。世界にとって、ボクには意味があるんだって、ボクがやっていることは必要なことなんだって、それだけで……それだけあれば、あとはもう、どうにか生きていけるんだから……だから」

苦しそうに喚くのは、巖の今の心境だった。

それが、夏の部屋の中、暑苦しさの中に人間の体温が重なって、その中でさらに発散されていく。

「必要だって、それだけを……。それだけあればいいから。意味があるって、僕の行為はこの世界に必要だって、ボクの頭の中に、偽りでもいいから叩き込んでくれないかな？」

嘘でもいいから、誰か、ぐちゃぐちゃにして、それで……それで

……」

弥生は目の前にある、醜い顔を愛しいように見つめていた。

ああ、私は、どんなことをしてもこの人のことを手に入れたいのだなー、と。

そして気付いた時には、弥生は自分の手で巖の頬を触っていた。

サワサワと、冷たく停滞している頬を撫で続ける。

そして、次々に流れてくる涙を、その手でぬぐった。

愛しいという感情。

それとともに弥生の心中には、ある一つの思いがあった。

世界とかそんな大きなものではない。

社会とか、そんな抽象の言葉ではない。

見えないものへの必要性ではなく、

もっと小さなもの。

その微粒子にも似たちっぽけなもの。

それに対する実感ならば、私は今すぐにも彼に与えられるのだと。

「……………島ちゃん」

その弥生の声が、巖を混乱から開放することになる。

下からの言葉は、優しく色めいていた。

綺麗な声だと、優しい声だと、巖はそう思った。

瞬間、母親の胎内にいるかのような安心感に、体中が包まれる。

ふんわりと、優しい匂いとともに。

柔らかなイメージが、頭の中を支配し始めている。

巖は、ずっとこうしていたいと、強く感じていた。

ゆっくりと、自分が満たされていく感覚を、これほどまでに受けることができるのだと、今さらながらに思った。

そして、あれほどまでに感じていた冷たい凝固物が、信じられない速度で氷解していくのが分かった。

おかしい幻想に、今まで捕らわれていたと、そう思う。

結局、僕の悩んでいたことは一つの観念に過ぎなかったのだろう。

それは、当たり前のことなのだ。

世界とか社会とか、そういうことではないのだ。

そんなものは、どこにも誰にもあるはずがなかった。

では、何があるのか？

それは、自分の心の中だけに。

ひとりひとりの中だけに。

たった一つだけあるものではないかと、巖は唐突に、そう思い至った。

「……………いいよ」

下からの声は、巖の耳を優しく響かせた。

身体の芯まで振動するかのような空気の流動とともに、その言葉は届いてくる。

それら一連の出来事に、「まるでこの人は天使みたいだな」と、巖は陳腐な感想を抱く。

事実、目の前にある弥生の顔には、すべてを許すかのような包容力が満ち溢れていた。

ドクン、と心臓が鳴るのを感じた。

弥生の口にした言葉の意味ならば、巖にも分かっていた。

優しい、気持ちのいい、その空気の震え。

それを認識するに至ったとき、心の底が、情欲とは別のもので癒されていくのが、はつきりと分かった。

優しく、包み込まれる。

満ち足りた思いと共に、身体の奥がほんやりと温くなる。

その温かさは、段々と身体の奥から外へと、拡散するかのように広がっていった。

まさに、至福の時間。

気持ちのいい、心地だ。

できればずっと……本当にずっと、こうしていたい。

いつまでも一緒に、弥生お姉ちゃんの隣にいたい。

そばにずっと。

2人で一緒に。

だけれど……、

巖は、弥生の体から、ゆっくりと離れた。

「……………」

突然の行動に、弥生は、無言で巖のほうを見つめる。

そこには寂しげな表情が、泰然として存在する。

その、眉の下がった表情に、巖は胸が締め付けられるのを感じていた。

でも、もう決めたことだった。



決められた。

自分ひとりで、決めることができた。

それは、巖にとって、初めて自分自身ではっきりと選択したこと。だからこれでいいのだと、巖は目の前の弥生の表情を吹っ切るように、そのように思った。

しかし巖は、なぜそのようなことを選択したのか、自分自身でも理解できていないようだった。

なぜこんなことを決めたのか、自分でもよく分からなかったのだ。何が、自分をこんな考えに走らせているのか。

なんでそれを実行に移そうとしているのか、巖にはその理由の部分が分からないでいた。

しかし、何をしようとしているのかは分かっている。

それはもう、自分の心の中にある。

最後まで弥生お姉ちゃんのを借りてしまったけれど、でもこれはこれで自分らしいと、そう思った。

瞼にたまった涙をぬぐった。

そして巖は、虚勢をはるように、その顔に笑みを浮かべる。

「……………勝手に悩んで、勝手にグチを言って……………申し訳なく思うんだけど、でも……………いや、いい訳だね。これは弥生お姉ちゃんに対するっていうことではなく、自分の心の整理のために、自分を安定させるための言葉だ。でも、それでも……………いや、だからこそ、僕は言わなくちゃ……………違うな、そうじゃなくて……………言いたいんだ。僕の意味で、言いたい。」

僕は、生きていきたいんだ。一人で」

言い切った後に巖は、「我ながら気持ちの悪いことを言っているな」と、感想を抱く。

今、巖は自分のためだけに行動している。

弥生のためではなく、自分だけのために。

それが、喉の奥に、吐き気にも似た症状を作っていた。

「……………恐いって……………さっきまで言ってたのに？」

言葉とともに、その顔がこちらに向く。

そこにはいつもの、無表情の弥生の姿があった。  
それを見て、巖は、ぐっと胸を詰まらせた。

今の僕が何を語っても、単なる自己満足になってしまつから、もう何も言いたくなかつたのだけれど、と。

そして、何かを言うということはそれは自分だけのため、弥生お姉ちゃんに対する言葉ではないのだけれど、と。

それでも、弥生は巖に質問の言葉を向けている。

巖のことだけを考えて……ただ、巖のためだけに。

それがまた、申し訳なくって、悲しくって……巖はただ心をこめて「……ありがとう」と言うことしかできなかった。

「恐いって感情は、まだなくなつてない……でも多分、死ぬまで……オカシくなるまで、きつとそれはなくならないんだと思う。だからそれとは共存していかなくちやならないって……そうは絶対に思えないけど……でも、僕は、とにかく僕の人生を生きてみたい。自分だけの人生を」

言葉とともに、巖は自分の中の考えがきつちりと整理されていくのを感じた。

それは、絡まっていた糸が、何かの拍子にすんなりとほどけていくイメージ。

大袈裟に言えば、なんだか生まれ変わったような新鮮な印象、それを巖は感じていた。

ああ、そうだ。

だから僕はこんなことを選んだんだ。

一人で生きていくことを。

一人で生きていきたいということ。

これは選択肢の中でもっとも悪い手なのかもしれなかった。

でも、それでも僕にはどういうわけか、これ以外の道が選べないのだ。

生きよう。

一人で。

多分、それは……、

「僕は、僕の人生に必要なんだ。世界とか社会とか、そういうことに対しては、僕はまったく必要なかった。どうでもいい存在なんだ僕は。必要もなければ意味もなかった。

だけど、僕の人生にとっては僕は意味がある、必要だ。僕は、僕が生きたために必要だった。意味があるんだ。だったら、それをちゃんと感じたいんだ。証明したい。社会に対してじゃない。人類のためじゃない。ただ自分のためだけに、僕は僕の残りの時間を使うよ」

「ごめん、という言葉をおうとして、でもそれが口から出ないように食いしばった。

これ以上、弥生お姉ちゃんを傷つけない。

その思い故に、巖はそれ以上の言葉を続けようとはしなかった。

決めたのだ。

だったら、それを最後まで貫き通すだけだと、虚勢の心でそう思う。

かっこ悪くなくても、錯乱しても、オカシくなくても、これだけは最後まで貫き通そうと、強く決意していた。

「か、顔、洗ってくる」

涙がまた溢れそうになった巖は、そう口実をつけて逃げ出そうとする。

途中、弥生と巖の目と目が合った。

寂しそうで、悲しそうな感情が、無表情に浮かんでいる。

今まで、ずっとずっと一緒だった。

いつでもどこでも……どこまでも続いていくのだと、何も考えなかった自分はそう思っていた。

それも一つの未来だったのだと、今になってそう思う。

でも、それを自分は選ばなかった。

だったら、と。

だったら僕のできることは……この人にしてあげられる事は、こんなことくらいしかない、と。

柔らかく。

はにかむように。

巖は、弥生に対して、力なく笑いかけた。

巖島巖はその後、11ヶ月後に『同化現象』を発症させた。

訳のわからない言葉と、気持ちの悪い表情を浮かべながら、そのまま巖の自意識はすべて消え去った。

彼の選んだ道が、幸いであるはずがなかった。

しかし、それが彼の選んだ道だったのだ。

その結果がどうであれ、その過程における苦しみと充実感。

それを思えば、巖の当初の決意は達成されたということが出来るだろう。

巖は、『死』んだ。

物語は、エピローグへ。

始まりの、プロローグへと戻る。

弥生の目の前には、尚のこと鉄の塊しかなかった。

第13小隊、貳番艦の『箱庭』、そのコックピットだ。

神経伝達ケーブルはすでに身体に装着されており、それも尚のこ  
と『箱庭』に繋がれている。

戦いは、近い。

あと少しの時間をもって、弥生は自身を『箱庭』として、戦場を駆けなければならなかった。

そんな中、弥生は今だに巖との思い出に心を馳せていた。

東京に居る頃。

浮き島に來た日々。

桜島での決別、そしてその後の時間。

それらを懐かしく思い出しながら、弥生は『現在』ではなく『過去』に縛られていた。

「……………島ちゃん」

結局、あの人はあのままやりとげてしまった。

ひよっとしたら、途中で泣きついてくるかもしれないという自分の願いは、脆くも崩れ去っていた。

最後まで一人きりで。

泣きそうになりながらも、そんな決定的な姿は見せないで、強がったように力なく笑う。

そのように、最初の決意どおりに、巖は最後まで生き抜いていた。最後の一秒。

あの、巖が巖であつた最後の時まで…………。

それを認識した上で弥生は「…………でも」と反証を加える。

「…………でも、島ちゃんはあれで本当によかったのだろつか」と。その提言した疑問に、弥生はすぐさま否定の考を入れた。

そんなはずない、と。

そんなことはないはずだ、と。

最後まで貫きとおそうとした巖は、それ故に消耗も激しかった。苦しく、身と心をガリガリと削り取っていく日々。

安らぎなどなく、すべての問題を自分ひとりで処理しなくてはならない。

その苦悩は、世界で一人きりで生きていくのと同義。生きていくのが常に綱渡り。

断崖絶壁で一筋だけ伸びた道を、ただひたすらに巖は進んでいった。

一歩間違えれば、すぐにでもその身は破滅する。  
精神の死。

オカシなることへの恐怖。

それと戦いながら、自分ひとりだけで生きていくというのは、正直、まったく想像もつかない苦行だったのだろう。

そこに、安らぎも、幸せも、あるはずがなかったのだ。

「…………… 苦しいなら、やめればよかったのに…………… よりよく生きていくために努力するのは、苦しむということじゃあ絶対じゃないのに……………」

呟く弥生の脳裏にはしかし、最後まで誇りを保ったまま逝った巖の姿が映し出されていた。

苦悩し、考え、それ故に楽な道などなかった。

それを続けたこと。

それこそが巖の為したかったことであり、それでこそ巖の願望が叶えられたということができるのだろうが、弥生はその考えを否定する。

「…………… 必要だとか、意味があるだとか…………… そんなことどうでもいいじゃない…………… 少なくとも私にとっては、島ちゃんだけいればよかったのに……………」

世界への必要性。

社会に対する自分自身の意味。

そんなものは、ちいさな微粒子にも劣る悪しき愚考。

必要だとか意味だとか、それらはすべて、身近に感じるべきものなのだ。

人と人の愛。

陳腐な、それら語り尽くされたもの。

大きな視点など必要なく、小さな監獄にも似た世界こそが求められる。

それこそが、幸せになる最短の道なのではないか、と、弥生はそう考えていた。

巖と弥生の考えの違いは、結局、誰を基準にするかの違いなのだろう。

巖は、自分を。

弥生は、巖を。

それぞれの尺度で考えられた思考には、そんな小さなところからこそ、個性の違いが存在していた。

「……………島ちゃん……………そそししし島ちゃん」

弥生が巖の跡をついで式番艦の『箱庭』に乗ってから、すでに13ヶ月が過ぎている。

時間の問題。

あと少しで、弥生にも巖と同じ道をたどることになる。

その兆候は、すでにそこかしこに現れていた。

だから、

だからこれが、『同化現象』故のものだったのか、それとも『箱庭』の真実たりうる客観的事実だったのか、それは誰にも分からない。

「……………ああああ」

感極まったような声をあげた弥生の目には、常軌を逸した感情が漂っていた。

虚空を見上げるように、コックピットの上、頭上を見上げる。

彼女の視点。

弥生の目には確かに、目の前に、すぐそこに、巖の姿があった。

「……………し、島ちゃん？」

声に答える者なし。

響かせたその声は、むなしく無人の空間に投げ出される。

それでも、目の前にはいた。  
いるのだ。

巖の姿が、そこにある。

「……………うん、そうだね……………もうすぐ……………会える」  
そこに、笑いかける。

満ち足りた表情で、目の前の人物に対して。  
それだけで、弥生にとっては十分だったのだ。

「……………頑張る」  
同化する。

『箱庭』と同化する。

もう、戻って来れないかもしれないという恐怖と戦って。  
しかし、今ではそれこそが弥生の望み。

戦う。

生きる。

頑張ろう、と。

鉄の塊。

人類の希望。

そんなことは関係なく。

弥生の脳裏には一つの存在しかあるはずもない。

「……………島ちゃん」

光に包まれた弥生の視点は、すぐさま高さ15メートルまで浮上する。

現実に取り戻された弥生には、しかしさきほどまでの悲観はない。  
決めたのだ。

巖と同様、決めていた。

生きよう、と。

あと何時間、何日、何週間。

残された時間。

島ちゃんに、胸をはって会えるように生きよう、と。  
動いた。

だからそこには、  
錯誤にも似た、  
嘘で彩られた、



そうであつても、

真実という不純物よりも、

真理という役立たずでも、

正しいものよりも何よりも、

輝くものが、そこにはあるのだ。

彼らの『生』は、これから続く。

死ぬまで、彼と彼女は病院の一室で、自意識をなくしたまま気持ち悪い様子で生き続ける。

ゴールなどなく、醜く、浅ましく。

滞留ですらない汚濁物がそこに。

壊してやりたくなるくらいにヒドいものでも。

殺意が芽生えるほどに気持ち悪くても。

それが、吐き気がするほど見るに耐えないものであつても。

死ぬまで、生き続けるしか、ないのだ。

（完結）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0087d/>

---

アナザー

2010年10月8日14時53分発行